

小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック

はじめに

小学校で新しい外国語教育が始まる。

新小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）において、中学年に外国語活動、高学年に外国語科が導入された。平成 30、31 年の学習指導要領移行期を経て、平成 32 年度から全面実施である。今年度は、移行期をスムーズに迎えるための準備期間である。

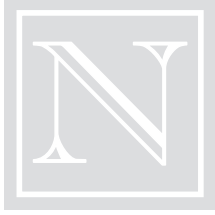
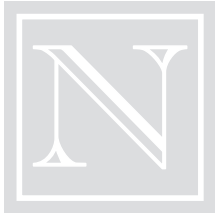
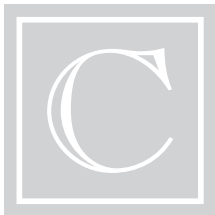
小学校におけるこの新しい外国語教育導入については、「教育再生実行会議」第 3 次提言（平成 25 年 5 月）に「小学校の英語学習の抜本的拡充、実施学年の早期化、教科化、指導時間増」などが盛り込まれたことに端を発する。その後、小学校における外国語教育の在り方も含め、日本の外国語教育の在り方について、「英語教育の在り方に関する有識者会議」、中央教育審議会初等教育分科会教育課程部会等で審議され、このたびの導入となった。

小学校の先生方からは、やっと外国語活動の指導に慣れてきたところなのに、また新しいことを始めるのか、外国語活動と教科外国語の違いは何なのか、教科外国語の指導をするのにどのような指導力が必要なのか、英語が苦手なのに、など、新しいものへの不安感と負担感の声が聞かれる。この新しいものへの不安感と負担感を抱かれるその大きな要因の 1 つが、先生方に正しい情報がきちんと伝わっていないことだと考える。

例えば、平成 29 年 2 月 15 日に多くの新聞紙面に、「小 3 から英語を学ぶ」「英語の教科化 不安広がる」「英語小 5 から文法」などの見出しがおどった。これらをご覧になった小学校の先生方はどう思われたらと思うかと不安になった。先生方に正しい情報を早く伝える、きちんと伝えることが、先生方の不安感、負担感を少しでも払拭することになると考えている。

本書は、そういう思いから作成に至った。先生方が求めておられること、これから始まる外国語教育についてぜひ理解をしておいていただきたいことを、基本編、授業研究編、実践編、実習編、理論編、研修指導者編の 6 つのカテゴリーで整理した。まず、基本編は、新学習指導要領に示された外国語教育について理解しておくべきことを、授業研究編は、小学校における外国語教育の入口と出口である、3 年生及び、6 年生の実際の授業をもとに、基本編で述べたことを、実際の外国語活動や、教科外国語の授業で具現化するとどうなるかを示した。次に、実践編では、授業研究編を支える様々な活動の趣旨やその在り方について、実習編では、先生方が外国語活動や教科外国語の授業を行う際に必要な英語のブラッシュアップの方法に加えて、実際に授業で使う英語を示した。ぜひ、付属の音声 CD をご活用いただき、ご自身の英語力のブラッシュアップをしていただきたい。理論編は、小学校の外国語教育に携わる方々が、理解しておくべき理論を示している。そして、最後の研修指導者編は、文部科学省が平成 26 年度より小学校の新しい外国語教育が各校に円滑に導入されるための環境整備を行っているうちの、教員指導力向上のための研修及び、先進的な取組を紹介している。ここでは、文部科学省が行っている研修のシステムを生かした各校での校内研修の在り方等について示すとともに、先進的な取り組み事例を 5 つ紹介している。各校での外国語教育の充実の参考にしていただきたい。

本書が、先生方の不安感や負担感を少しでも払拭し、新しく始まる外国語教育をやってみようじゃないか、面白そうだ、子供たちと一緒に創っていこう、と思っていいただくのに役立つことを切に願っている。



はじめに	3	本書の構成	7
もくじ	4	本書の利用方法と付属音声 CD について	9

基 本 編	11
--------------	-----------

1 小学校外国語教育（外国語活動・外国語）の基本理念	12
2 小学校外国語教育の目標	14
3 小学校外国語教育の内容	19
4 小学校外国語教育の言語活動	23
5 小学校外国語教育の評価	27

授 業 研 究 編 I ● 外国語活動	31
----------------------------	-----------

第 3 学年外国語活動年間指導計画例〔案〕	32
第 4 学年外国語活動年間指導計画例〔案〕	34
第 3 学年「Unit 4 I like blue. すきなものをつたえよう」単元指導計画	36
第 3 学年「Unit 4 I like blue. すきなものをつたえよう」（全 4 時）指導案	39
授業研究の視点① 児童の興味のある題材の選定	44
授業研究の視点② 聞く必然のある活動	46
授業研究の視点③ 話す必然のある活動	48
授業研究の視点④ 他教科等と連携した活動	50
授業研究の視点⑤ 評価	52
授業研究の視点⑥ 教材の作成と活用の仕方	53
授業研究の視点⑦ 「主体的・対話的で深い学び」の在り方	54

授 業 研 究 編 II ● 外国語	55
---------------------------	-----------

第 5 学年外国語年間指導計画例〔案〕	56
第 6 学年外国語年間指導計画例〔案〕	58
第 6 学年「Unit 5 My Summer Vacation 夏休みの思い出」単元指導計画	60
第 6 学年「Unit 5 My Summer Vacation 夏休みの思い出」（全 8 時）指導案	65
授業研究の視点① 「聞くこと」の活動	76
授業研究の視点② 「話すこと」の活動	78
授業研究の視点③ 「読むこと」の活動	80
授業研究の視点④ 「書くこと」の活動	82
授業研究の視点⑤ Small Talk	84
授業研究の視点⑥ 他教科等と連携した活動	86
授業研究の視点⑦ 評価	87
授業研究の視点⑧ 「主体的・対話的で深い学び」の在り方	88



実践編 89

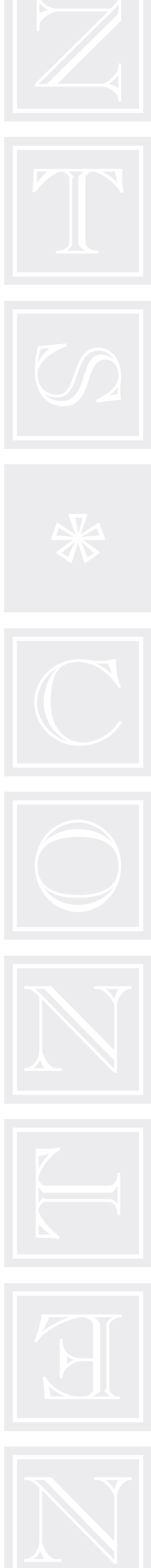
1 題材選定の仕方・教材の在り方	90
2 年間指導計画の立案	92
3 指導案の作成	95
4 「聞くこと」についての指導の在り方	98
5 「話すこと [やり取り・発表]」についての指導の在り方	99
6 「読むこと」についての指導の在り方	100
7 「書くこと」についての指導の在り方	101
8 特別支援を要する児童に配慮した進め方	102
9 他教科等と連携した指導の在り方	103
10 歌・チャンツの活用	105
11 絵本の活用	106
12 ティーム・ティーチングの進め方	108
13 視聴覚教材・ICT の活用	114

実習編 117

1 クラスルーム・イングリッシュ [④]	118
2 基本英会話 [④]	124
3 Small Talk (スモール・トーク) [④]	130
4 スピーキング・トレーニング [④]	135
5 発音トレーニング	138
6 指導者としてリスニング能力を向上させるために	142
7 指導者としてスピーキング能力を向上させるために	143
8 指導者としてリーディング能力を向上させるために	144
9 指導者としてライティング能力を向上させるために	145

理論編 147

1 児童期の第二言語の学びの特徴	148
2 小学校外国語教育における「主体的・対話的で深い学び」の在り方	156
3 小学校外国語教育における指導者の役割	158
4 外国語活動と外国語科の連携の在り方	160



研修指導者編

163

1 英語教育推進リーダー中央研修・中核教員研修の概要及び校内研修の進め方	164
2 授業研究の進め方	170
3 カリキュラム・マネジメントを推進するために	172
4 授業改善の視点	175
5 小中連携の在り方	182

教員の指導力向上を図る取組事例 185

- 事例 1 県教育委員会・市教育委員会・専科教員・小学校が連携して、小学校教員の指導力向上を図る
～英語教育強化地域拠点事業における事例～
(福井県教育委員会・勝山市教育委員会・勝山市立成器西小学校)
- 事例 2 小学校教員の指導力向上に向けた外国語(英語)教育中核教員研修の充実
～英語教育推進リーダー中央研修・研修実習の事例～
(川崎市総合教育センター)
- 事例 3 巡回教員や専科教員(コーディネーター)、兼務教員等を活用して、小学校教員の指導力向上を図る
～宮若市、宗像市、糸島市における事例～
(福岡県教育委員会)
- 事例 4 校内研修サポート教材の開発・提供による校内研修の充実を通して小学校教員の英語力・指導力向上を図る
～自分たちで進める校内研修の事例～
(福岡県教育センター)
- 事例 5 小学校教員の指導力向上を目指した小中連携・小中連携の取組
～小中連携・小中連携の事例～
(京都市立大藪小学校・京都市立久世西小学校・京都市立久世中学校)

巻末資料

小学校学習指導要領 ● 第 4 章 外国語活動(抜粋)	208
小学校学習指導要領 ● 第 2 章 第 10 節 外国語(抜粋)	211
新教材で扱われる語彙一覧(カテゴリー分類)	216
新教材で扱われる表現例一覧(言語の働き分類)	220

本書の構成

本書は、先生方が外国語活動・外国語科を円滑に進めていただくための研修用ガイドブックとして作成されたものである。なお、本書における「新教材」とは、文部科学省が開発・配布する平成 30 年度からの移行期間用の教材のことをいう。

以下に、本書の構成を示す。



基本編

現行版学習指導要領から新学習指導要領への改訂ポイントとなる、小学校外国語教育の「基本理念」「目標」「内容」「言語活動」「評価」についてまとめた。



授業研究編

新教材の年間指導計画例をベースに、単元指導計画や指導案の解説・立案上の留意点を、授業研究での大切な視点に沿ってまとめている。Ⅰは外国語活動（3・4 年生）、Ⅱは外国語科（5・6 年生）の指導例から学ぶ。



実践編

年間指導計画の立案や授業を実際に行う際に心得ておきたいこと、授業の進め方、ティーム・ティーチングの進め方、様々な活動を行う際の注意事項等、外国語活動・外国語科共通で重要となる事項の説明及び解説をまとめた。



実習編

授業中によく使用する「クラスルーム・イングリッシュ」、ALT との打ち合わせに必要な「基本英会話」、外国語科で導入される「Small Talk」の例、英語を発音・発話する際の注意点をまとめた「発音トレーニング」「スピーキング・トレーニング」を収録。スキル別能力向上策もまとめた。（校内・自己）研修のみならず、授業の構成を考える際にも利用していただきたい。（付属 音声 CD 対応）



理論編

「児童期の第二言語の学びの特徴」、新学習指導要領で導入された「主体的・対話的で深い学び」の小学校外国語教育での在り方、指導者の役割や「外国語活動と外国語科の連携の在り方」を具体的に説明及び解説。外国語教育の指導者として知っておいていただきたい情報である。



研修指導者編

校内研修において、研修を実施する立場の先生方に有益な情報をまとめた。「教員の指導力向上を図る取組事例」には、以下の5つの県・市・小学校等の研修事例を取り上げた。研修を企画・運営する際にぜひ参考にされたい。



- 事例 1 福井県教育委員会・勝山市教育委員会・勝山市立成器西小学校
- 事例 2 川崎市総合教育センター
- 事例 3 福岡県教育委員会
- 事例 4 福岡県教育センター
- 事例 5 京都市立大藪小学校・京都市立久世西小学校・京都市立久世中学校



巻末資料

学習指導要領や新教材で取り扱われる語彙（カテゴリー分類）や表現例（言語の働き分類）を掲載した。

以上を参考にいただき、新学習指導要領の外国語活動・外国語科の目標を目指し、研修を充実したものにしていただくとともに、授業等の事前準備等にも利用していただきたい。

本書の利用方法と付属音声 CDについて

1

本書の利用方法

中核教員研修に参加した先生方は、研修に参加後、本書を熟読した上で、研修で学んだことを校内で伝達研修する必要がある。また、自校の教員に本書『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』を熟読させ、校内研修で学んだことを整理させることも大切である。

2

付属音声CDの利用方法

本書には、「実習編」の音声収録したCDが付属している。校内研修の際には、本書付属のCDを使って実際に英語を聞いたり、発音してみたりすることが大切である。また、校内研修に限らず、朝の連絡会や打ち合わせなどで、それらの一部を毎回、あるいは曜日を決めて、聞いて発音することも、教員の英語運用能力向上への意欲を高めることにつながる。加えて、各教員がCDを利用して、練習することも大切である。

各プログラムのトラック番号は以下を参照されたい。

Track	収録内容	
1～13	1 クラスルーム・イングリッシュ	
14～17	2 基本英会話	1 授業内での会話例
18～24		2 打ち合わせ等で用いられる会話例
25～29		3 授業や学校に関わる表現例
30～38	3 Small Talk (スモール・トーク)	1 5年生
39～47		2 6年生
48～51	4 スピーキング・トレーニング	1 イントネーション
52～54		2 強勢
55～58		3 リズムと語の連結

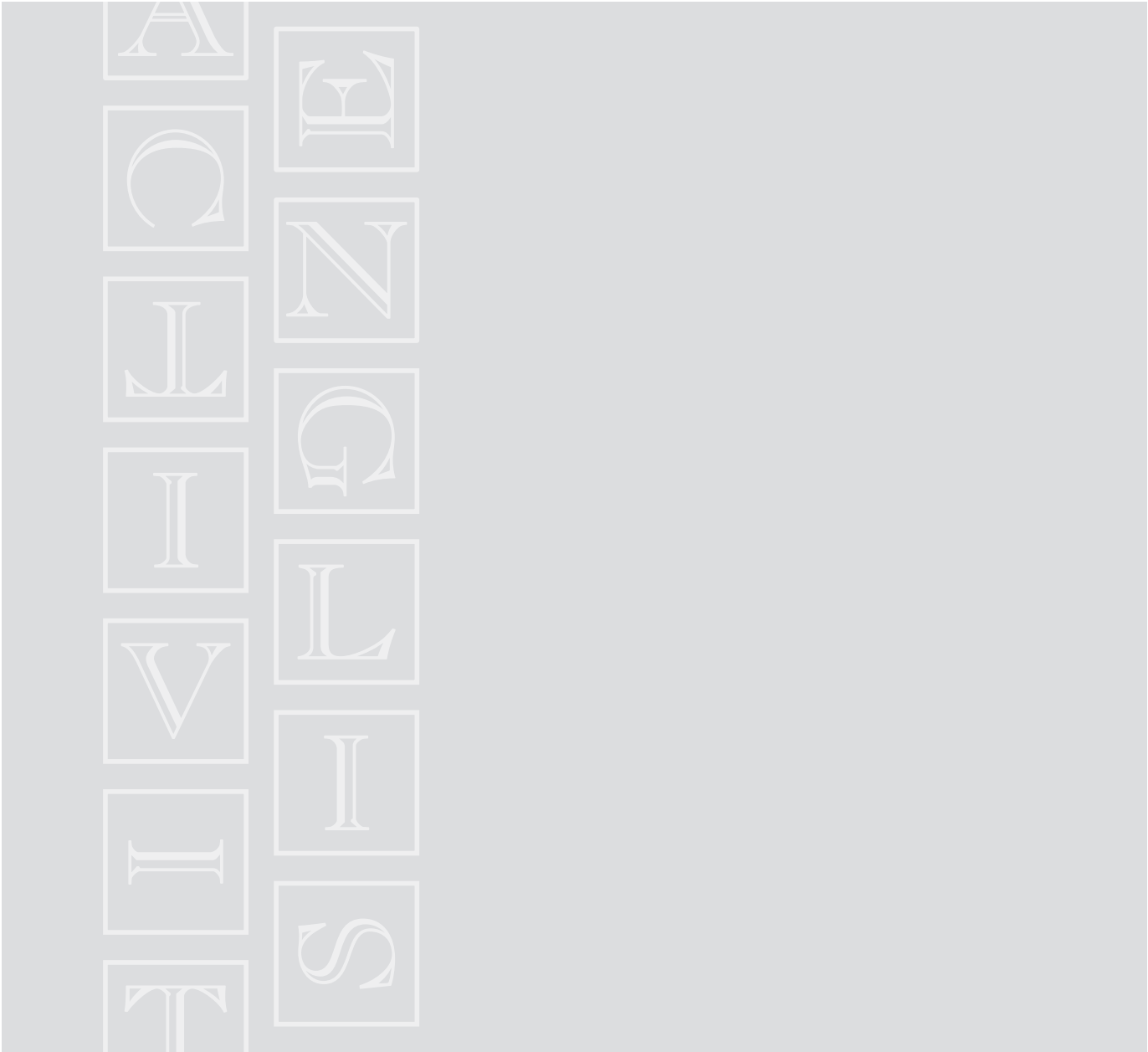
3

「発音トレーニング」対応動画の活用

本書の実習編「**5** 発音トレーニング」(p.138～141)の練習に当たっては、動画配信サイトYouTubeの文部科学省公式チャンネル(<http://jp.youtube.com/mextchannel>)に登録される予定の動画を活用することをお勧めする。



基 本 編



1 小学校における外国語教育の新しい段階への一歩

小学校高学年に外国語活動が導入されてから、今年度で7年目を迎える。その間、小学校の先生方のご尽力により、児童の高い学習意欲や、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められており、教科として外国語の学習を開始する前に、外国語活動として外国語の音声によるコミュニケーションを体験しておくことは、後の外国語学習にとって大きな意義があるといえる。

しかし、一方で課題もある。外国語活動で、音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないなど、外国語活動での学びがうまく中学校英語教育に生かされていないことである。また、外国語活動は「慣れ親しみ」であるがために、2年間外国語活動を経験して何ができるようになったかを児童が自覚しにくいと、抽象的な思考が高まる段階である高学年児童には、より体系的な学習が求められることである。このようなことから、平成29年3月に告示された小学校学習指導要領(以降、「新学習指導要領」とする)において、外国語活動の成果と課題を踏まえ、中学年に外国語活動、高学年に教科外国語科が導入されることになった。外国語活動は、年間35単位時間程度、外国語は年間70単位時間程度の設定である。

小学校における外国語教育のこの新しい段階では、中学年から「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることが求められている。

2 外国語活動の基本的な理念**(1) 外国語を用いたコミュニケーションを図る素地となる資質・能力の育成**

先述したとおり、高学年の外国語活動は大きな成果を挙げており、教科として学習する前に、外国語によるコミュニケーションを体験することの意義は大きいといえる。よって、新学習指導要領における外国語活動は、改訂前の高学年外国語活動と同様、音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーションを図る素地を育成することがねらいである。

(2) 幅広い言語に関する能力の育成

児童のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めることが求められる。その際、知識のみによって理解を深めるのではなく、体験を通して理解を深めることが大切である。体験的に理解を深めることで、言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語に対する興味・関心を高めたり、これらを尊重する態度を身に付けさせたりすることは、国語に関する能力の向上にも資すると考えられる。例えば、日本語と外国語を比較したり、外国語を用いたコミュニケーションを通したりして、日本語と外国語の音声の違いに気付かせたり、日本語の使用だけでは気付くことが難しい日本語の音声の特徴や言葉の仕組みへの気付きを促したりすることができる。

(3) 外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ

外国語に慣れ親しませることで、高学年以降の外国語学習につながる聞く力や、話す力を育むことが期待される。慣れ親しませる際には、児童が興味・関心をもつ題材のもと、児童がやってみたいと思う活動を設定することが大切である。中学年で身近で簡単な事柄について音声で十分にコミュニケー

ションを図っておくことが、高学年以降の外国語学習の動機付けとなり、さらに話題を広げてコミュニケーションを図ることにつながっていく。

3 外国語の基本的な理念

(1) 外国語を用いたコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成

外国語活動が「外国語を用いたコミュニケーションを図る素地となる資質・能力」、中学校外国語が「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を求められていることを踏まえて、高学年外国語では「素地」の上の段階としての「基礎」を養うこととしている。先述した通り、高学年の外国語活動の大きな課題は、小学校での学びがうまく中学校で生かされていないことであったことから、新学習指導要領では、小学校教育までの学習の成果が中学校教育に円滑に接続され、育成を目指す資質・能力を児童生徒が身に付けることができるよう工夫することを強く求めている。これまでは、外国語活動は小学校で、外国語科は中学校でと、指導される場が異なっていたため、うまく連携することが難しかったかもしれないが、新学習指導要領では、小学校内で、外国語活動と外国語科が指導されることからスムーズな接続が大いに期待される。

(2) 「聞くこと」「話すこと」及び、「読むこと」「書くこと」の4技能を扱う

初めて外国語に触れる外国語活動において音声面を中心としたコミュニケーションの体験を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんだことを生かし、高学年外国語科では、「聞くこと」「話すこと」に加えて、「読むこと」「書くこと」の4技能を扱うことになる。改定前の学習指導要領における高学年外国語活動においては、児童の文字を読みたい、書きたいという、読み書きへの興味が高まっている状況が散見されることから、新学習指導要領における高学年外国語科において、「読むこと」「書くこと」を扱うことは児童の発達の段階に合致していると思われる。ただし、「読むこと」「書くこと」については、「慣れ親しみ」であり、「聞くこと」「話すこと」に求める技能と同等ではないことに留意する必要がある。

(3) 音声から文字への指導を行う

外国語活動には大きな成果が認められるものの、課題もあることは先述した通りである。その課題について、音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないことなどが指摘されている。そこで、これらに対応し、外国語活動において音声中心で学んできたことを円滑に文字の指導につなげるために、外国語科において英語の文字や単語などの認識、国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気づき、語順の違いなど文構造への気づきなど、言語能力向上の観点から言葉の仕組みの理解などを促す指導が求められる。

具体的には、「読むこと」「書くこと」に関しては、英語の文字の名称の読み方を、活字体の文字と結び付けて発音すること、4線の上に書くことができることが求められる。また、中学年における外国語活動から十分に音声で慣れ親しんだ語彙や基本的な表現を読んだり書いたりすることに細かな段階を踏んで慣れ親しませた上で、それが実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能となることを目指す必要がある。

(4) 言語活動を通して、文や文構造への理解を図る

言語活動を通して児童が簡単な語彙や基本的な表現を使って自分の気持ちや考えを表現できるようになることが求められている。文や文構造の解説を通してではなく、児童が聞いたり読んだり、話したり書いたりする必然性のある活動を通して、それらが目指されなければならない。そうしてこそ、児童が自ら思考、判断、表現することになることを忘れてはならない。

平成 29 年 (2017) 3 月に新しい学習指導要領が告示され、小学校中学年に「外国語活動」、高学年に教科「外国語」が導入された。これにより、日本の外国語教育の枠組みが変更されることになり、中学校以降の英語教育も大きく変わることになる。ここでは、今回の導入までの経緯を概観し、小学校「外国語活動」及び「外国語」の目標について解説する。

1 小学校への外国語教育導入の経緯

(1) 研究開発学校での実践の時代から必修化まで

文部科学省において、外国語教育について本格的に導入が検討され始めたのは 1990 年代に入ってからである。それ以降の小学校英語教育の経緯については 4 つのステージに分けて説明できる〈図表 1〉。

第 1 ステージでは、平成 4 年 (1992) に大阪市の公立小学校 2 校と中学校 1 校が文部省 (当時) の研究開発学校の指定を受け、「国際理解教育の一環としての英語教育の研究」がスタートした。以降、研究開発学校の指定が増え、平成 8 年 (1996) には、各都道府県 1 校単位に研究指定校が拡大した。カリキュラムも教材もないところから、小学校英語教育の在り方を現場が中心になって模索した時代であった。

第 2 ステージは「総合的な学習の時間」の中での英語教育の時代である。平成 10 年 (1998) 告示の学習指導要領により、各学校は、「総合的な学習の時間」の枠において、学校の独自の判断により、「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等」を実施することができるようになった。「総合的な学習の時間」の内容は各学校に任されていたこともあり、当然、地域によっても、学校によっても内容や方法は様々であった。結果的に、中学校との連携や教育の機会均等という面からも課題が指摘されるようになり、共通の指導内容等を設定することの必要性が強く求められるようになった。

第 3 ステージは、必修化の時代である。「総合的な学習の時間」において取り組まれている英語活動は、教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続等の観点から課題があり、国として各学校において共通に指導する内容を示すことが必要とされ、平成 20 年 (2008) 告示の小学校学習指導要領により、5・6 年生で週 1 時間の外国語活動が新設され必修化された。ただし、小学校における外国語活動の目標や内容を踏まえれば一定のまとまりをもって活動を行うことが適当であるが、教科のような数値による評価にはなじまないものと考えられることから「教科」ではなく「領域」としての位置付けとなった。

(2) 必修化から教科化へ

平成 20 年 3 月告示の学習指導要領により、平成 23 年 4 月から小学校 5・6 年生を対象に全面実施された外国語活動であったが、その 2 年後の平成 25 年 5 月の教育再生実行会議 (第 3 次提言) において、「小学校の英語学習の抜本的拡充、実施学年の早期化、教科化、指導時間増」などが盛り込まれた。同年 12 月には「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が公表され、「小学校 3・4 年生では活動型で週 1～2 時間、5・6 年生では教科型で週 3 時間程度」という計画が提案された。

その後、文部科学省は平成 26 年 2 月に「英語教育の在り方に関する有識者会議」を設置し、次期学習指導要領の改訂に向けて本格的な検討を開始した。有識者会議は同年 9 月には「今後の英語教育の改善・充実方策について：グローバル化に対応した英語教育改革 5 つの提言」として、その議論をまとめた。同年 11 月には下村文部科学大臣 (当時) から中教審初等中等教育分科会教育課程部会への諮

問が行われ、「論点整理」（平成27年8月）を経て、平成28年（2016）12月21日に「答申」が取りまとめられた。

4つのステージ		期間	審議会の答申等
1	研究開発学校での英語教育 〈英語活動〉	平成 4(1992) ～ 13(2001)年	・外国語教育の改善に関する調査研究協力者会議（平成 5 年） ・『英語が使える日本人』育成のための戦略構想（平成 14 年）
2	「総合的な学習の時間」の中での 英語教育〈英語活動〉	平成 14(2002) ～ 22(2010)年	・教育再生実行会議（第 3 次提言）（平成 25 年） ・グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成 25 年）
3	英語教育必修化 〈外国語活動〉	平成 23(2011) ～ 31(2019)年	・英語教育の在り方に関する有識者会議提言（平成 26 年）
4	英語教育教科化 〈外国語活動・外国語〉	平成 32(2020)年 ～	・中教審次期学習指導要領答申（平成 28 年） ・次期学習指導要領告示（平成 29 年）

〈図表 1〉小学校外国語教育導入の経過

答申では、中学年から「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達段階に応じて段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することが求められた。また、新たに①アルファベットの文字や単語などの認識、②日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、③語順の違い等の文構造への気付きなど、言語能力向上の観点から言葉の仕組みの理解等を促す指導を教科として行うために必要な時間を確保することが提言された。時間数については、他教科等においては、学習内容の削減を行わないこととしたこと、また、平成 20 年（2008）の中教審答申においては、小学校の週時数は 28 コマが限度とされたことから、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」当初に提案された時間が縮小され、中学年では週 1 時間、高学年では週 2 時間（モジュールを含む）ということになった。

2 小学校外国語教育の目標

中教審の答申を踏まえて、新学習指導要領では改訂前の学習指導要領の内容をほぼ引き継ぎつつ、目標や内容を再整理している。「外国語活動」及び「外国語」を含む、すべての教科等の目標及び内容において、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の 3 つの柱を、児童の発達段階に応じて、バランスよく育成することが求められている。

(1) 外国語活動

第 1 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

中教審答申では「見方・考え方」を「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」と定義している。これは、コミュニケーションを行う際には、単に語彙や文法などの知識・技能を身に付けただけでは不十分であることを述べている。文化や社会を理解するとともに、コミュニケーションの目的や場面などを考慮して、自分の考

えをまとめていくことが必要である。

- (1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

3つの柱のうち「知識及び技能」に関するもの。「体験的に理解を深め」という文言に注意したい。コミュニケーションと切り離して「言語や文化」を指導することは想定しておらず、あくまでも、コミュニケーションの体験を通して、それらの知識・技能に慣れ親しむことが大切であることを述べている。「慣れ親しむ」というのは改訂前の学習指導要領でも使われている表現で、「知識及び技能」の定着を直接的なねらいにしているのではないことに留意したい。

- (2) 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

「思考力、判断力、表現力等」に関するもの。「自分の考えや気持ち」を伝え合うことになるため、当然「思考力・判断力」が求められる。ただし、「伝え合う力の素地」とあることから、正確性にこだわるよりも、むしろ、できるだけ多くの活動を体験させることにより、伝え合う力を養うことが大切だと示唆している。

- (3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

「学びに向かう力、人間性等」に関するもの。「相手に配慮しながら」という具体的な達成目標が示されている。高学年で「他者に配慮しながら」と記述されていることを考えると、中学年で示されている「相手」という記述は、いつも周りにいる友達や指導者（ALTを含む）などを指している。相手が理解しやすくするには、どのように話したらよいのかなどを考えることが大切であるとともに、改訂前の学習指導要領にも示されているように、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を重視していることも大切なポイントである。

3つの柱は、個別に育成されるものではなく一体的に育成されることが大切である。その結果、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力が育成されるのである。

(2) 外国語

第1 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

外国語活動と大きく異なる点は、外国語による「聞くこと」「話すこと」に、「読むこと」「書くこと」の言語活動が加わったことである。

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

音声や基本的な表現に十分に慣れ親しんでいることを前提に、音声や文字、語彙、文構造、言語の働きなどを、気付きで終わらせることなく、知識として理解し、技能として使えることを目標としている。ただし、それらの知識や技能は限定的であることに留意したい。例えば、「読むこと」に関しては、何度

も目にし、口頭でも言えるようになっていく語彙や表現を視覚情報を伴いながら推測して読めることであり、音声と綴りの関係を理解し、未習の語彙を読めるようになることを目標としているわけではない。

- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

児童が大まかな意味を理解する方法に慣れていることを前提にしている。例えば、「読むこと」においても、単語を目で見て、何度も発音されるのを聞いて、文字と音の関係を大まかに理解し、慣れ親しんだ単語が読めるようになることを求めているのである。

- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

外国語活動が「相手に配慮しながら」であるのに対し、「他者に配慮しながら」となっている。教室内の親しい相手から、外国からの留学生や地域に住む外国人へとコミュニケーションの機会が広がっていくことに対応したものである。

改訂前の学習指導要領の高学年での外国語活動が中学校外国語科へつながっていくように、中学年の外国語活動は、教科としての位置付けではないものの、高学年の外国語科へつながり、中学校へとつながるものである。高学年の外国語科は、中学年の外国語活動で培われたコミュニケーション能力の素地やコミュニケーションへの積極的な態度が育成されたことを踏まえて実施することになる点に留意したい。

3 英語の目標

中学年では、「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達段階に応じて段階的に「読むこと」「書くこと」を加え教科としての学習を行うことになる。以下にそれぞれの目標を、ポイントを絞って解説する。

(1) 外国語活動

① 聞くこと

「ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取」ったり、「身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味が分かるようにする」ことが求められている。小学校中学年で児童は初めて外国語に触れることになる。そのことを考えれば、「ゆっくりはっきりとした英語」を聞かせることは当然のことである。また、児童が興味・関心を示すような身近な事物を扱うことも大切である。また、「文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする」ことも目標になっている。「文字の読み方」とは、文字の“名称の読み方”と、“文字が持っている音”（例えば、Bという文字は /bi:/ という名称と /b/ という音を持っている）の両方を指すが、外国語活動では、前者のみを指していることに注意したい。

② 話すこと【やり取り】

挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたり、自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり、サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、質問をしたり質問に答えたりすることが目標である。初めて外国語に触れることもあり、使う表現は慣用的なものが多いが、機械的なやり取りに終わることがないようにしたい。また、外国語を話すことに抵抗感をもつ児童もいる。指導者がサポートをし、児童同士がサポートをし合える環境づくりも大切である。

③ 話すこと〔発表〕

人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを話すようにすることがポイントとなる。「人前」というのは児童にとっても抵抗感があると思うが、事前の準備も可能なので、実物を活用したりして、様々なコミュニケーションのツールがあることを体験させたい。

(2) 外国語

① 聞くこと

短い話の概要を捉えることができるようにすることがポイントである。これは、中学校における「短い説明の要点を捉えることができる」につながるものである。

② 読むこと

先述したように、「文字の読み方」には文字の“名称の読み方”と、“文字が持っている音”がある。外国語活動と異なり、外国語科では“文字が持っている音”まで加えて指導する。ただし、音と綴りの関係まで指導することを意味するのではないことに留意したい。

③ 話すこと〔やり取り〕

外国語活動と大きく異なるのは、「その場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする」という点である。「その場で」というのは、相手とのやり取りの際、それまでの学習や経験で蓄積した英語での話す力・聞く力を駆使して、自分の力で質問したり、答えたりすることができるようになることを指している。

④ 話すこと〔発表〕

「伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを表現できるようにする」という項目が大切である。ただ話せばよいということではなく、どのように話す内容を整理し、自分の考えや気持ちを表現できるかを考えさせたい。中学校でのスピーチの基礎をつくる活動である。

⑤ 書くこと

「語順を意識しながら書き写すことができるようにする」という点がポイントである。英語の語順は日本語とは大きく異なっている。英語の文字を「書き写す」過程を通して、英語の語順にも気付かせることが大切となる。また、日本語は語と語の間にスペースは置かないが、英語では単語と単語の間にスペースを置く。このことにも注意して「書く」活動に取り組むことが大切となる。



新学習指導要領では、外国語活動が高学年から中学年へ、また、高学年は中学校の内容が前倒しされたかのような印象を受ける。しかし、そのように考えることは、その目標を見誤ることにつながりかねない。特に、高学年に導入された「読むこと」「書くこと」は慣れ親しませる段階であることに留意したい。また、文構造や語順等については、コミュニケーション活動を通して気付きを促すことが大切であり、文法的な説明等を優先させることではない。コミュニケーション能力の育成は小中高を通じた共通した目標である。発達段階にあった目標を設定し、樹木が緩やかに成長するように、児童生徒のコミュニケーション能力を緩やかに確実に育んでいくことが重要である。

「外国語活動」及び「外国語」の目標は、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱から構成されている。「知識及び技能」は、実際のコミュニケーションの場面において活用し、思考・判断を伴う発信や受信を繰り返すことによって身に付き、それらの活動を繰り返すことで、「思考力、判断力、表現力等」とともにより深まる。また、これらを繰り返すことで自信が付くとともに、「学びに向かう力、人間性等」も涵養される。したがって、これら3つの柱は不可分に結び付いている。

「学びに向かう力、人間性等」は、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を育成することを通して培われていくものである。したがって小学校学習指導要領「外国語活動」及び「外国語」では、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」の2つの柱で内容を構成している。

ここでは、「外国語活動」と「外国語」に分け、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」のポイントを解説する。

1 外国語活動

(1) 知識及び技能

「知識及び技能」は、実際に英語を用いた言語活動を通して、体験的に身に付けることができるようにすることが大切である。言語活動と切り離して、単語をリスト化して覚え込ませたり、文の一部を言い換えさせたりする「パターン・プラクティス」のような機械的な練習は求められていない。意味のある言語活動を通して、児童に繰り返し体験的に理解させることが重要であり、「知識及び技能」は体験の結果として身に付くものであることに留意したい。

「知識及び技能」の項目の1つ目として、「言語を用いて主体的にコミュニケーションを図ることの楽しさや大切さを知ること」がある。中学年の児童がコミュニケーションを図る相手は、身近にいる担任やALT等の指導者であることが多い。日本語でなら簡単に伝わることであっても、外国語となると難しい。しかし、だからこそ、ふだん使い慣れていない外国語を使用することによって、言語を用いてコミュニケーションを図ることの難しさを体験することができ、同時に伝わったときの楽しさも実感することができる。ここでいう「言語を用いて」は、英語が中心になるが、必ずしも英語のことのみを指しているのではない。広い意味での「言語」と捉えることが大切である。広く捉えることによって、外国語活動は日本語のコミュニケーション能力の向上にも資することになる。また、主体性を引き出すには、児童が伝えたい相手、伝えたい内容を工夫し、伝え合う必然性のある場面を設定して活動を行わせることが大切となる。

2つ目は「英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと」である。児童は大人に比べて音声をまねることや、繰り返すことを厭わない傾向がある。この児童期の特性を生かして、英語の音声やリズムなどに慣れ親しませることは、中学年の児童にとっては大切な活動となる。例えば、appleの発音ひとつとっても、大人はなかなかカタカナ発音から抜け出せないが、児童は難なく英語の発音をまねることができる。何度も繰り返すことによって英語の単語には強勢（強く読むところ）があって、それが英語のリズムを作っていることに気付くようになる。また、英語と日本語を比較して、言葉の造りや言葉の成り立ちについての共通

点や相違点に気付かせることにより言葉の面白さや豊かさに気付くきっかけを与えることにもなる。『Hi, friends!』ではその例として、starfish (=星の形をした海の生き物)を取り上げ、日本語でも同じようにその形に着目して海星(ヒトデ)と漢字で書くことなどを紹介している。

3つ目は「日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考えがあることに気付くこと」である。外国語活動では、外国の文化のみならず日本の文化を含めた様々な国や地域の生活、習慣、行事などを積極的に取り上げて、その違いを知り、多様な考え方があることに気付くことが期待されている。例えば、新教材の4年生「Unit3 I like Mondays.」においては、児童にとって身近な学校生活を取り上げて世界の子供たちの放課後や週末の過ごし方を映像資料で紹介しており、自分たちとの共通点や相違点を知ることができる。日本では「当たり前」のことが外国では「当たり前ではない」こともある。児童にとって身近な事例に触れることにより、多様な考えがあることに、児童なりに気付くきっかけになるようにしたい。

4つ目は「異なる文化をもつ人々との交流などを体験し、文化等に対する理解を深めること」である。グローバル化が加速する社会においては、異なる文化や言語をもつ人々との交流が増えていくことが予想される。児童期の段階から、異文化に触れ、交流の体験をしておくことが、その後の文化理解や異文化交流への態度を形成していく。そこで、ALTや留学生、地域に住む外国人など、異なる文化をもつ人々との交流を通して、文化などの理解を深めることが重要である。このような交流活動においては、相手が必ずしも英語のネイティブ・スピーカーである必要はない。英語を含め、世界には様々な言語や文化があることに気付くことが大切である。

(2) 思考力、判断力、表現力等

「思考力、判断力、表現力等」の1つ目に、「自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を使って、相手に配慮しながら、伝え合うこと」がある。ここでは「相手に配慮しながら」という点がポイントである。自分のことや身近な事柄について、ただ単に表現すればよいというのではなく、相手が聞きたいことは何なのか、相手が理解しやすいように表現するにはどうすればよいかなど、児童の発達段階に応じて考えを深めて表現することを求めている。この場合の「相手」は身近なクラスメートの場合が大半である。知っている英語の語彙や表現もお互いに限られている。相手が理解しやすいように、実物を使ったり、ジェスチャーを交えたりすることなどを考えながら伝え合う活動が行われるとよい。

2つ目として「身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう、工夫して質問をしたり質問に答えたりすること」がある。ここは「自分の考えや気持ちなどが伝わるように」というところがポイントである。例えば、自分の考えの大切なところは強くはっきり発音することを考えることや、気持ちを表すには気持ちを込めた言い方にも工夫することが必要であることなどを理解させるようにしたい。

2 外国語

(1) 知識及び技能

「英語の特徴やきまりに関する事項」として、「ア 音声」、「イ 文字及び符号」、「ウ 語、連語及び慣用表現」、「エ 文及び文構造」を指導することになっている。もちろん、それらの項目は、「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指して言語活動を行う中で指導することになる。ここではポイントをいくつか

に絞って解説する。

「ア 音声」について、「語と語の連結による音の変化」がある。それは、例えば an apple などのように二語が続く場合に音が連結される現象を指している。また、What time のように前の語の最後の文字の音と、それに続く語の最初の文字の音が重なる場合は音が一部脱落する。さらに、Would you のように前の語の最後の音と後ろの語の最初の音が影響し合う現象もある。中学校でも同じようなことを指導することになるが、中学校では文字と音の関連について明示的な指導がなされる。それに対し、小学校では、「読むこと」に関しては慣れ親しむレベルであるため、文字を介して音の変化の規則性を指導することは難しく、聞き慣れた語句に限って、音の変化があることに気付く程度で十分である。

次に「語や句、文における基本的な強勢」についてである。まず、「語」の場合を考えてみる。日本語は高低でアクセントを付けるが、英語では強勢でアクセントを付ける。例えば、日本の「端(はし)」と「箸(はし)」を区別するものは「は」の音の高低である。英語の場合は、例えば desert (砂漠) と desert (捨てる) を区別するのは、音の強勢になる。désert (砂漠) の場合は前の方に強勢があり、desért (捨てる) の場合は後ろに強勢がある。英語の単語はほぼすべてに強勢があり、それが英語のリズムをつくっている。「句」についてであるが、英語には一般的に内容語は強く読まれるが、前置詞等 (in, on, under 等) の機能語は特別な場合を除いて強く読まれることはない。例えば in the **bag** のような場合は、bag が内容語であるので bag が強く読まれることになる。「文」の場合は、基本的に文の中で重要な語に強勢が置かれる。例えば「私は(動物の中では)犬が好き」という場合の I like **dogs**. という場合は dogs に強勢が置かれる。

「ウ 語、連語及び慣用表現」の「語」については、外国語活動で慣れ親しんだ語を含めて小学校段階では 600 ～ 700 語に触れることになっている。「連語」については get up, look at 等の活用頻度の高い基本的なもの、また、「慣用表現」については、excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcome 等の活用頻度の高い基本的なものを指導することになっている。

「語」等に関して重要な点は、聞いたり読んだりして意味を理解できるように指導すべき語彙(受容語彙)と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙(発信語彙)とがあることに留意することである。また、中学年では受容語彙レベルにとどめることがあっても、学年が上がり、繰り返し触れることによって高学年では発信語彙レベルまで引き上げるものなどもあることに留意する必要がある。

「エ 文及び文構造」に関しては、文法や文構造の指導を明示的に行うのではなく、あくまでも言語活動の中で、繰り返し、聞いたり話したりするなかで気付きを促し、理解させるようにすることが大切である。

ここに述べた事項は、現在の小学校外国語活動ではほとんど扱われていない。指導者がこれらの基本的な指導事項を身に付けて、かつ、学習指導要領の趣旨を十分に理解した上で指導に当たることが重要となる。

(2) 思考力、判断力、表現力等

「思考力、判断力、表現力等」に関する事項として「ア 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合うこと」と記されている。これは、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」について述べたものである。

外国語活動では「自分のことや身近で簡単な事柄」となっていたが、外国語科では「身近で簡単な事柄」になっている。自分中心の世界から、自分以外のことについても表現できるようになることを求めている。したがって、扱う言語材料においても第三者を表す he や she などの代名詞が導入されている。

また、外国語活動と異なっている点は、「伝えようとする内容を整理した上で」とされたことである。「身近で簡単な事柄」を羅列するのではなく、場面や状況を考えながら、どのような事柄を取り上げ、どのような順序で伝えたほうがよいのかなどについて考えなければならない。当然、「自分の意見や気持ち」を伝え合うのであるから、自分なりの考えをもつことが大切で、気持ちを表現する工夫等を行うことが大切である。

「思考力、判断力、表現力等」に関する事項として次に「イ 身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりすること」がある。読むことについては「推測しながら」というところがポイントである。注意すべきは、「読む」ということが、中学校で行われている文章の「読解」を意味するものではなく、あくまで「語句」や「基本的な表現」を対象としていることである。児童は音声に合わせて英語の文字を見ることに慣れている。また、教材を通して多くの文字を見てきている。「推測しながら読む」というのは、児童が慣れ親しんできた語句や表現に限って、書かれたものを、これまでの活動を想起し読むことと考えると分かりやすい。また、外国語科では文字と音とを結び付ける指導を行っている。例えば B という文字を /b/ と発音することを学んでいる。したがって、book の初頭音の /b/ の音をヒントにして blue を推測しながら読んでみることも含まれている。

「語順を意識しながら書く」というのは、英語の語順の大切さを意識しながら書くことについて述べている。Sakura pushed Taku. を Taku pushed Sakura. と語の順序を替えれば、意味が大きく異なってしまうように、英語では意味の伝達において語順が重要な役割を担っている。小学校では「書くこと」については、「書き写したり、例の中から言葉を選んで書く」レベルであるが、これらの活動を通して、英語の語順の重要性に児童が気付くことが大切となる。



「知識及び技能」は、思考・判断を伴う受信・発信を繰り返すことによって身に付き、それらの活動を繰り返すことで自信がつき、かつ、主体的に学習に取り組む態度も養成される。本節では「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を分けて説明したが、実際の授業の場面では、これらを一体的に指導していくことを忘れてはならない。

「外国語活動」や「外国語」の目標の中でコミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を育成するのは「言語活動を通して」とされており、言語活動は外国語活動や外国語科において核である。言語活動は外国語活動では「聞くこと」と「話すこと」であり、外国語科では「読むこと」と「書くこと」が加わる。外国語活動や外国語科において、言語活動をどのように捉えたらよいかについて解説する。

1 「外国語活動」及び「外国語」における言語活動

各教科等では、基礎的な「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な「思考力、判断力、表現力等」の能力を育成するために、記録、要約、説明、論述、話し合いといった言語活動の充実が図られてきた。ここで重要とされたのが言語能力の向上である。言語能力は、すべての教科等の学習の基盤であり、より一層充実を図ることが必要であるとされ、新学習指導要領においても引き続き、国語科を要としながら各教科等で言語能力の向上を図ることとなった。

外国語活動や外国語科における言語活動は、記録、要約、説明、論述、話し合いといった言語活動よりは基本的なものである。学習指導要領の外国語活動や外国語科においては、言語活動は、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。したがって、外国語活動や外国語科で扱われる活動がすべて言語活動かというそうではない。言語活動は、言語材料について理解したり練習したりするための指導と区別されている。実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うという言語活動の中では、情報を整理しながら考えなどを形成するといった「思考力、判断力、表現力等」が活用されると同時に、英語に関する「知識及び技能」が活用される。つまり、英語を用いず、日本語だけで情報を整理しながら考えなどを形成する活動は、外国語活動や外国語科においては言語活動とは言い難い。一方で、英語を用いているが、考えや気持ちを伝え合うという要素がない活動も言語活動であるとは言い難い。例えば、発音練習や歌、英語の文字を機械的に書く活動は、言語活動ではなく、練習である。練習は、言語活動を成立させるために重要であるが、練習だけで終わることのないように留意する必要がある。

単元の中で言語活動がきちんと位置付いているか、また、練習は言語活動につながるものとなっているかなどについて検討することが重要である。例えば、4年生「Unit 3 I like Mondays.」という単元では、曜日を尋ねたり答えたりして、自分の好きな曜日を伝え合うという目標が設定されている。単元の始めの段階では、カレンダーを見て曜日の言い方を知り、曜日に関する歌を歌ったり、ミッシング・ゲームを行ったりして、この単元で使用するよう設定されている語彙（曜日の言い方）や表現（What day is it?, It's Monday., Do you like Mondays?, Yes, I do./No, I don't. 等）の発音練習を行う。そして、終末段階で、好きな曜日を伝え合ったり教室を歩いてペアになり自分と同じ曜日が好きな人を見つけたりする言語活動を行うことにつなげている。単元構想の際に、目標に合致した言語活動となっているのか、またそのための指導や練習がなされているのかという点について検討し、適切な計画となるようにすることが大切である。

なお、言語活動は、領域別の目標と対応して、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の5領域で示されている（外国語活動においては、「聞くこと」、「話

すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」の3領域)。「話すこと」を2つに分けて、5領域とする考え方は、国際的な基準であるC E F R (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠」)においても採用されている。5領域は、外国語理解に関する領域(「聞くこと」と「読むこと」と外国語表現に関する領域(「話すこと」と「書くこと」)の順に示されている。

2 「外国語活動」における言語活動

外国語活動においては、「聞くこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」の3領域で言語活動が示されている。外国語を習得していく過程においては、英語の音声に十分触れることと、実際に使ってみることが重要である。特に、外国語活動において初めて外国語に触れる児童が多いことを踏まえると、聞くことの言語活動が十分に設定されることが大切である。言語活動とは、互いの考えや気持ちを伝え合う活動であるということを述べた。「互いに伝え合う」という行為には、話すことはもちろん聞くことも含まれている。教員やALTなどが話す英語を聞いたり、児童が話す英語を聞き合ったり、音声教材などを聞いたりして、話し手の考えや気持ちなどを理解するという「聞くこと」の活動を十分行わせたい。そして、その際、児童の興味・関心を考慮しながら、意欲的に活動に取り組めるようにすることが大切である。

「聞くこと」の活動においては、聞いて理解するだけにとどまらず、聞いて動作をしたり行動をしたり、応答したりするのが自然であり、聞いた後、動作や行動をさせたり、「話すこと」の言語活動を組み合わせたりするなど工夫するとよい。例えば、「聞くこと」の言語活動「(イ) 身近な人や身の回りの物に関する簡単な語句や基本的な表現を聞いて、それらを表すイラストや写真などと結び付ける活動」について、新教材の3年生「Unit5 What do you like?」ではLet's Listen という活動が設定されており、誰が何を好きなのかを聞き取り、線で結ぶという、聞いた内容とイラストや写真等とを結び付ける活動が設定されている。イラストや写真を用いた活動では、これらの非言語情報が手がかりとなって、英語の語句や表現の意味を捉えやすくなる。また、「(ウ) 身近で簡単な事柄に関する短い話を聞いておおよその内容を分かたりする活動」が挙げられているが、話を聞くだけでなく、おおよその内容を分かった結果、絵を並べ替えたり、話の内容に合う絵を選んだり、あるいは教員やALTの質問に答えたりさせるとよい。3年生「Unit9 Who are you?」や4年生「Unit9 This is my day.」では絵本を読み聞かせながら、大まかな内容を理解させたり、どのページのことを言っているのか考えさせたり、内容に関する簡単な質問に答えさせるなどの活動が設定されている。

「(ウ) 文字の読み方が発音されるのを聞いて、活字体で書かれた文字と結び付ける活動」では、文字の導入がされている。ここでは、文字の名称の読み方を聞いて、どの文字かを特定させる活動を意味している。新教材では、3年生「Unit6 ALPHABET」と4年生「Unit6 Alphabet」において、英語の文字をそれぞれ導入している。ポインティング・ゲームなどで、文字の名称の読み方を聞いて、文字を指差す活動が設定されている。この際、英語の音声に慣れ親しませることを主とし、文字の書き方の指導とならないように留意する必要がある。文字の名称の読み方を聞いて文字を特定する行為は、apple という語の音声を聞いてリンゴの絵と結び付ける活動と同様である。言語活動(イ)と(ウ)は、「聞くこと」の内容が違うだけである。

「話すこと[やり取り]」や「話すこと[発表]」の言語活動においては、十分に音声で聞いた語句や表現を用いらせることが重要である。外国語を学んでいく過程では、「聞くこと」の力が「話すこと」

の力に先行するのが通常である。また、聞いて理解できる語句や表現に比べて、話す際に用いることのできる語句や表現は少ない。この外国語学習の特徴を踏まえると、児童に聞かせた語句や表現をすぐに使わせようとするのは不適切である。十分に音声で語句や表現に触れる機会をつくり、話すことのレディネスを整えるようにすることが重要である。「聞くこと」から「話すこと」へという流れは、外国語学習では、「インプット（入力）を十分に行ってからアウトプット（出力）させるようにする」、「インプットが重要である」、「アウトプットを急がさない」という表現がされることもある。単元構想の際、この流れを意識するとよい。例えば、4年生「Unit 4 What time is it?」を見てみよう。第1時では、〈図表1〉に示す活動が設定されている。

Let's Chant は、時刻に関する語句や表現の発音を練習するための指導であるが、ほかは「聞くこと」の活動が設定されている。第4時（最終時）では、〈図表2〉に示す活動が設定されている。

第4時の主活動は Activity である。気に入っている時間を伝え合うという「話すこと [やり取り]」の言語活動が設定されている。この例のように、音声で十分聞かせて「話すこと」につなげるようにすることが重要である。

- 先生の生活についての話を聞く。
- 時刻を聞き取る。
- キー・ナンバー・ゲーム
- 【Let's Chant】 What time is it?
- ジェスチャー・ゲーム
- ポインティング・ゲーム

〈図表1〉第1時の活動

- 【Let's Chant】 What time is it?
- 【Let's Listen】 時刻を聞き取り、
誌面の登場人物のイラストに
記入する。
- 【Activity】 気に入っている時間を
伝え合う。

〈図表2〉第4時の活動

3 「外国語」における言語活動

外国語科においては、「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の5領域で言語活動が示されている。外国語科においても、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を中心としながらも、言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うようにする。

「聞くこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」は、外国語活動における言語活動を踏まえて、外国語活動において扱われた簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し使わせる言語活動を設定し、児童が活用できるようにすることが大切である。話題については、児童の発達の段階に従って、外国語活動と比べて広がりがあることに留意する。例えば、「聞くこと」の言語活動を取り上げると、聞く内容が外国語活動では「身近で簡単な事柄」、「身近な人や身の回りの物」、「文字の読み方」であったものが、外国語科では「自分のことや学校生活など、身近で簡単な事柄」、「日付や時刻、値段などを表す表現など、日常生活に関する身近で簡単な事柄」、「友達や家族、学校生活など、身近で簡単な事柄」に関するものになっている。

「話すこと [発表]」の言語活動では、「(ア) 身の回りの物の数や形状などについて、人前で実物やイラスト、写真などを見せながら話す活動」、「(イ) 自分の好き嫌い、欲しい物などについて、人前で実物やイラスト、写真などを見せながら話す活動」、「(ウ) 時刻や曜日、場所など、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物やイラスト、写真などを見せながら、自分の考えや気持ちな

どを話す活動」のように、人前で実物やイラスト、写真などを見せながら発表することが示されている。例えば、6年生「Unit9 Junior High School Life」で、中学校生活について発表するというスピーチが設定されている。このようなスピーチの活動では、スピーチを聞くことについても指導をすることが重要である。互いにスピーチを聞いて、話者が伝えたい内容を理解するように促すようにする。実物やイラスト、写真などの活用は、自分の伝えたい内容を効果的に伝えるにはどうしたらよいかということを考えさせる良い機会である。また、英語で表現できないことを補うというコミュニケーションの工夫の場面でもある。コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて、実物やイラスト、写真の選定や制作に取り組めるよう意識付けたり、時間を確保したりすることが大切である。

外国語科においては、「読むこと」と「書くこと」の言語活動が導入される。例えば、「読むこと」の言語活動の「(ア) 活字体で書かれた文字を見て、どの文字であるかやその文字が大文字であるか小文字であるかを識別する活動」や「(イ) 活字体で書かれた文字を見て、その読み方を適切に発音する活動」は、文字を認識するという基礎的な活動である。コミュニケーションの目的や場面、状況が具体的に設定されていないと、練習活動に終わってしまうこともある。ホテルの受付の場面における活動において、“My name is Haruna. H-a-r-u-n-a.”と児童が自分の名前の綴りを発音する活動を設定するなど、工夫をすることが重要である。

「書くこと」の言語活動では、高学年の2学年にわたって活動を継続的に繰り返し、文字を書くことを十分に経験させることが重要である。また、次の(イ)から(エ)までの「書くこと」の言語活動で示されているように、英語の語句や表現が示されている中で、書かれたものを参考にして、書き写しながら、自分の気持ちや考えなどを書いて伝え合うようにさせる(下線参照)。

- (イ) 相手に伝えるなどの目的を持って、身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句を書き写す活動。
- (ウ) 相手に伝えるなどの目的を持って、語と語の区切りに注意して、身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ基本的な表現を書き写す活動。
- (エ) 相手に伝えるなどの目的を持って、名前や年齢、趣味、好き嫌いなど、自分に関する簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いた例の中から言葉を選んで書く活動。

書き写す経験の中で、例を参照しなくても語句や表現を書ける児童がいるかもしれない。しかしながら、小学校段階では、すべての児童に、綴りを覚えて語句や表現を書くことができるようになることを期待するのは不適切であることに留意する。



外国語活動と外国語科では、目標に示された資質・能力を、言語活動を通して育成する。言語活動とは、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動である。必要に応じて、理解や練習のための指導を行う。「聞くこと」などのインプットの活動から「話すこと」などのアウトプットの活動の流れが大切である。外国語科においては、「読むこと」や「書くこと」の言語活動が導入される。コミュニケーションの目的や場面、状況を明確に設定したり、工夫したりすることが重要である。語句や表現を書く活動については、例を参照しながら書き写すことを行うものとする。

評価基準、評価方法など、新学習指導要領の下での学習評価については、平成 28 年 12 月の中教審答申の指摘(※)を踏まえ、今後の国における具体的な検討を受けて、追記・修正をする予定である。なお、平成 30・31 年度の移行期間における学習評価については、平成 29 年度中に通知される予定である。

※「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)(平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会)の主な指摘

- 観点別評価については、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点に整理する。
- これらの(3つの)観点については、毎回の授業で全てを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てていくことが重要。
- 学習評価の工夫改善に関する参考資料についても、詳細な基準ではなく、資質・能力を基に再整理された学習指導要領を手掛かりに、教員が評価基準を作成し見取っていくために必要な手順を示すものとなることが望ましい。そうした参考資料の中で、各教科等における学びの過程と評価の場面との関係性も明確にできるよう工夫することや、複数の観点を一体的に見取ることも考えられることなどが示されることが求められる。
- 指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要。
- 「主体的に学習に取り組む態度」については、子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながらか学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。

外国語教育における学習評価については、中教審答申において次のように指摘されている。

(外国語教育における学習評価)

- 観点別学習状況評価の実施に当たっては、各学校において領域別の目標を踏まえ設定する学習到達目標や、年間を通じた目標、単元目標において、求められる資質・能力を、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点により明確にしておく必要がある。その上で、年間を通じた目標を見通した上で単元目標に基づき観点別の評価を行うことが重要である。
- 小学校高学年の教科としての外国語教育における「観点別学習状況の評価」についても、中・高等学校の外国語科と同様に「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点により行う必要がある。その際、必要な資質・能力を育成するための学びの過程を通じて、筆記テストのみならず、インタビュー(面接)、スピーチ、簡単な語句や文を書くこと等のパフォーマンス評価や活動の観察等、多様な評価方法から、その場面における児童の学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価することが重要である。

- また、小学校高学年の外国語教育を教科として位置付けるに当たり、「評定」においては、中・高等学校の外国語科と同様に、その特性及び発達の段階を踏まえながら、数値による評価を適切に行うことが求められる。その上で、外国語の授業において観点別学習状況の評価では十分に示すことができない、児童一人一人のよい点や可能性、進歩の状況等については、日々の教育活動や総合所見等を通じて児童に積極的に伝えることが重要である。小学校「外国語活動」については、現行の学習指導要領において数値による評価にはなじまないとされていること等を踏まえ、顕著な事項がある場合に、その特徴を記入する等、文章の記述による評価を行うことが適当である。
- 具体的な「観点別学習状況の評価」及び「評定」の在り方については、英語教育強化地域拠点事業等における先進的な取組も参考にしつつ、子供たち一人一人に学習指導要領の内容が確実に定着するよう、学習指導の改善につながる取組が進められることが期待される。

【参考】外国語教育においては、評価について一般的に以下の考え方や手法が用いられている。

1 評価方法の工夫

学習評価の際には、目標に準拠した評価として適切な評価方法を用いることが求められる。活動の観察やパフォーマンス評価（インタビュー〔面接〕、授業内の発表、児童が書き記したワークシートや作品等の評価）など、多様な評価方法から児童の学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価することが重要である。

外国語活動などにおける「慣れ親しみ」に関する評価については、活動の観察やワークシートや作品等による評価が適切である。慣れ親しんでいる児童の姿を、単元の中で使用することが設定されている語句や表現を用いて活動を行っている状態と考えると、後日、評価をするのは不適切である。

なお、外国語科における「聞くこと」及び「書くこと」と「読むこと」の文字に関する評価については、活動の観察、ワークシートや作品（ポスターやパンフレット）の分析、ペーパーテスト等の方法が考えられる。「話すこと」の評価については、活動の観察、パフォーマンス評価、授業内の発表等の方法が考えられる。

2 評価時期の工夫

授業改善のための評価は日常的に行われることが重要であるが、目標に準拠して児童の学習の進捗状況を把握する学習評価は、毎回の授業ですべてを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で最適な時期に行うことが適切である。特に外国語学習では、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で語句や表現に繰り返し触れたり使用したりすることで、それらを活用できる力が付くことを考えると、ある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において評価することが重要である。

3 学校としての創意工夫の重要性

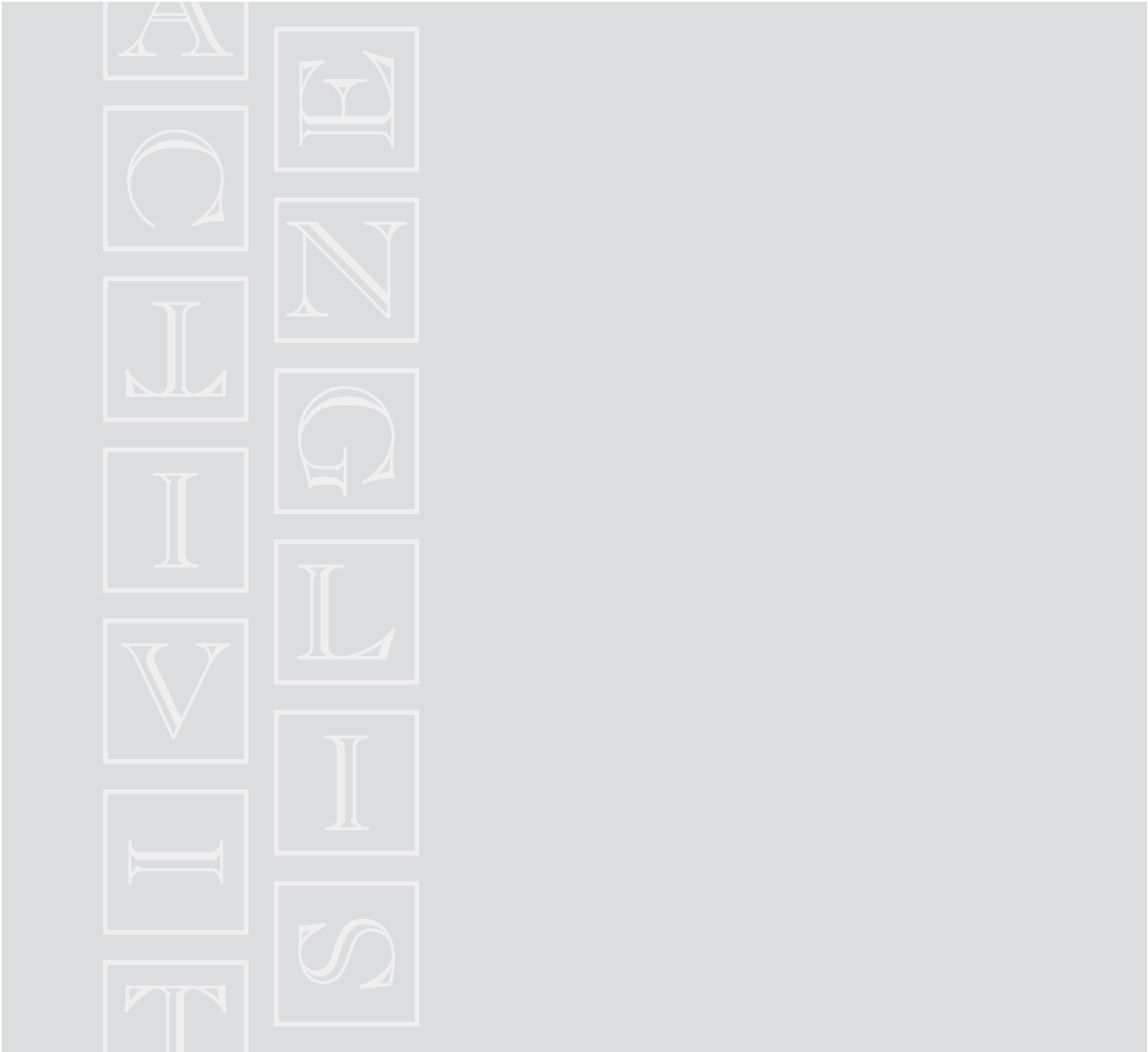
新学習指導要領においては、外国語活動においても外国語科においても、学年ごとの目標を適切に定め、2 学年間を通じて目標の実現を図るようすることが求められている。教師の共通理解と力量の向上、学校全体として評価についての力量を高めるためにも、学校としての評価の方針、方法、体制、結果等について、校長のリーダーシップの下、日頃から教師間の共通理解を図る必要がある。こ

のように、評価に関する情報の共有や交換により、経験年数等に左右されず教師が共通の認識をもって評価に当たることができるようにすることが重要である。

さらに、複数の教師で、どのように学習評価を進めれば指導に生かす評価の充実が図れるのか、教師にとって過大な負担とならないかなどについて確認し合うことが、効果的で効率的な評価を行うことにつながる。以上のことを学校として組織的に実施するために、校内研究・研修の在り方を一層工夫する必要がある。その上で、これまでの実践の蓄積を生かしていくことが大切であり、学校として組織的・計画的に取り組むことが、評価の妥当性、信頼性等を高めることになる。



授業研究編Ⅰ ● 外国語活動



第3学年 外国語活動 年間指導計画例〔案〕

時 数	単 元 名	単 元 目 標	主 な 活 動 例
1 2単位 時間	Hello! あいさつをして 友達になろう	- 世界には様々な言語があることを知り、挨拶や名前の言い方に慣れ親しむ。 - 名前を言って挨拶をする。 - 相手に伝わるよう工夫しながら名前を言って挨拶を交わそうとする。	- 世界の様々な言語での挨拶を知る。 - 自分の名前を伝え、挨拶をする。
2 2単位 時間	How are you? ごきげんいかが？	- 表情やジェスチャーの大切さや表す意味の違いに気付き、感情や状態を表す語や表現に慣れ親しむ。 - 表情やジェスチャーを付けて挨拶をする。 - 表情やジェスチャーを付けて相手に伝わるように工夫しながら挨拶をしようとする。	友達と挨拶をして、ジェスチャーを交えて自分の様子や状態を伝える。
3 4単位 時間	How many? 数えてあそぼう	- 日本と外国の数の数え方の違いから、多様な考え方があることに気付き、1から20までの数の言い方や数の尋ね方に慣れ親しむ。 - 数を尋ねたり答えたりして伝え合う。 - 相手に伝わるように工夫しながら数を尋ねたり答えたりしようとする。	身の回りの物の数や、好きな漢字の画数を尋ねたり答えたりして伝え合う。
4 4単位 時間	I like blue. 好きなものをつたえよう	- 多様な考え方があることや、外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付き、色の言い方や、好きかどうかを尋ねたり答えたりする語や表現に慣れ親しむ。 - 自分の好みを伝え合う。 - 相手に伝わるように工夫しながら自分の好みを紹介しようとする。	自分の好きなものについて話したり、質問に答えたりする。
5 4単位 時間	What do you like? 何が好き？	- 日本語と英語の音声の違いに気付き、身の回りの物の言い方や、何が好きかを尋ねたり答えたりする語や表現に慣れ親しむ。 - 何が好きかを尋ねたり答えたりして伝え合う。 - 相手に伝わるように工夫しながら何が好きかを尋ねたり答えたりしようとする。	どのような物が好きかを尋ねたり答えたりして伝え合う。
6 4単位 時間	ALPHABET アルファベットとなかよし	- 身の回りには活字体の文字で表されているものがたくさんあることに気付き、活字体の大文字を識別し、文字の読み方に慣れ親しむ。 - 自分の姓名の頭文字を伝え合う。 - 相手に伝わるように工夫しながら自分の姓名の頭文字を伝えようとする。	文字のカードを使って、自分の姓名の頭文字を伝え合う。
7 5単位 時間	This is for you. カードをおくろう	- 日本語と英語の音声の違いに気付き、形の言い方や、欲しいものを尋ねたり答えたりする語や表現に慣れ親しむ。 - 欲しいものを尋ねたり答えたりして伝え合う。 - 相手に伝わるように工夫しながら欲しいものを紹介しようとする。	- プレゼントするカードを作るために、欲しい色や形を尋ねたり答えたりする。 - 作成したカードを見せて紹介する。
8 5単位 時間	What's this? これなあに？	- 外来語とそれが由来する英語の違いに気付き、身の回りの物の言い方や、ある物が何かを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 - クイズを出したり答えたりする。 - 相手に伝わるように工夫しながらクイズを出したり答えたりしようとする。	身の回りの物に関するクイズを作って、相手に伝える目的をもって動作を交えながら尋ねたり答えたりする。
9 5単位 時間	Who are you? きみはだれ？	- 日本語と英語のリズムなどの音声の違いに気付き、誰かと尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 - 絵本などの短い話を聞いて、おおよその内容が分かる。 - 絵本などの短い話を反応しながら聞くとともに、相手に伝わるように台詞をまねて言おうとする。	絵本の読み聞かせを聞いて、身の回りの物に関する簡単な語句や基本的な表現とそれを表すイラストなどを結び付ける。

この年間指導計画例〔案〕では、児童が発話をする表現例・語彙例を記載している。

表現例	新出語彙・語句例	既出表現・語彙例	HFとの関連
Hello. Hi. I'm (Hinata). Goodbye. See you.	hello, hi, friends, I, am, goodbye, see, you		1-L1
How are you? I'm (happy).	how, are, 気持ちを表す語 (fine, happy, good, sleepy, hungry, tired, sad, great)	Hello. Hi. I'm (Hinata). Goodbye. See you.	1-L2
How many (apples)? Ten (apples). Yes. That's right. No. Sorry.	many, 数 (1-20), marble, ball, pencil, eraser, ruler, crayon, apple, strawberry, tomato, circle, triangle, cross, stroke, yes, no, sorry, that, is, right	how, Hello. Hi. I'm (Hinata). Goodbye. See you.	1-L3
I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. I don't like (blue).	like, do, don't, 色 (red, blue, green, yellow, pink, black, white, orange, purple, brown), スポーツ (soccer, tennis, baseball, basketball, dodgeball, swimming), 飲食物 (ice cream, pudding, milk, orange juice), 野菜 (onion, green pepper, cucumber, carrot), who, touch, rainbow	Hello. Hi. I'm (Hinata). Goodbye. See you.	1-L4 1-L5
What do you like? I like (tennis). What (sport) do you like? I like (soccer).	what, color, スポーツ (sport, volleyball, table tennis), 食べ物 (food, hamburger, pizza, spaghetti, steak, salad, cake, noodle, egg, rice ball, jam), 果物 (fruit, orange, grape, pineapple, peach, melon, banana, kiwi fruit, lemon)	I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. 数 (1-20), 色, 飲食物, スポーツ	1-L4 1-L5 1-L9
(Card 'A'), please. Here you are. Thank you. You're welcome.	大文字 (A-Z), card, alphabet, please, here, thank, welcome, 数 (21-30, 0), book, drum, fish, gorilla, hat, ink, jet, king, monkey, notebook, pig, queen, rabbit, sun, tree, umbrella, violin, watch, box, yacht	you, are, 数 (1-20)	1-L6 2-L1
What do you want? (A star), please. Here you are. This is for you. Thank you. You're welcome.	this, a, for, big, small, 形 (square, rectangle, heart, star, diamond), bus, flower, 動物 (dog, cat, panda, mouse, bear)	I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. I don't like (blue). What (sport) do you like? How many (apples)? Here you are. Thank you. You're welcome. 形 (circle, triangle, cross), 色	1-L5 1-L6
What's this? Hint, please. It's (a fruit). It's (green). It's (a melon). That's right.	it, hint, 動物 (elephant, tiger, owl, raccoon dog), 昆虫 (dragonfly, grasshopper, spider, moth), nest	I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. That's right. No. Sorry. 数 (1-30), 果物, 飲食物, 動物, 野菜, 色, what, is, this, please	1-L4 1-L7
Are you (a dog)? Yes, I am./No, I'm not. Who are you? I'm (a dog). Who am I? Hint, please.	long, 動物 (cow, dragon, snake, horse, sheep, chicken, wild boar), 状態や気持ちを表す語 (shiny, scary, round, furry), 身体部位 (head, eyes, ears, nose, mouth, shoulders, knees, toes), not	I'm (Hinata). I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. What (sport) do you like? How many (apples)? Hint, please. big, small, are, 色, 形, 動物, 果物, 野菜, 飲食物, 数 (1-30)	2-L7

3年生では、Unit 6～Unit 9においてアルファベットの文字とその読み方を扱うことを想定している。

第4学年 外国語活動 年間指導計画例〔案〕

時数	単元名	単元目標	主な活動例
1 2単位 時間	Hello, world! 世界のいろいろなことばであいさつをしよう	- 様々な挨拶の仕方があることに気付くとともに、様々な挨拶の言い方に慣れ親しむ。 - 友達と挨拶をして、自分の好みなどを伝え合う。 - 相手に配慮しながら友達と挨拶をして、自分の好みなどを伝え合おうとする。	- 世界のどの国の挨拶かを考える。 - 友達に好きなものなどを伝えたりして、挨拶をする。
2 4単位 時間	Let's play cards. 好きな遊びを伝えよう	- 日本の遊びと世界の遊びの違いを通して、多様な考え方があることに気付くとともに、様々な動作や遊びの言い方や、遊びに誘う表現に慣れ親しむ。 - 好きな遊びを尋ねたり答えたり、遊びに誘ったりする。 - 相手に配慮しながら友達を自分の好きな遊びに誘おうとする。	- 世界の様々な天気について知り、天気と衣類を結び付ける。 - 天気に合わせて行う遊びを決めたり提案したりする。
3 3単位 時間	I like Mondays. 好きな曜日は何かな？	- 世界の同年代の子供たちの生活を知るとともに、曜日の言い方や曜日を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 - 自分の好きな曜日を伝え合う。 - 相手に配慮しながら自分の好きな曜日を伝えようとする。	曜日を尋ねたり答えたりし、自分の好きな曜日を伝え合う。
4 4単位 時間	What time is it? 今、何時？	- 時刻や生活時間の言い方や尋ね方について慣れ親しむ。 - 自分の好きな時間について尋ねたり答えたりして伝え合う。 - 相手に配慮しながら自分の好きな時間について尋ねたり答えたりしようとする。	イラストなどを参考に、一日の生活の中の自分の好きな時間を伝え合う。
5 4単位 時間	Do you have a pen? おすすめの文房具セットをつくろう	- 文房具など学校で使う物や、持ち物を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 - 文房具などの持ち物について、尋ねたり答えたりして伝え合う。 - 相手に配慮しながら文房具などの持ち物について尋ねたり答えたりしようとする。	- ある文房具などを持っているかどうかを尋ねたり答えたりする。 - 相手にプレゼントしたい文房具セットを考えて紹介する。
6 4単位 時間	Alphabet アルファベットで文字遊びをしよう	- 身の回りには活字体の文字で表されているものがたくさんあることに気付くとともに、活字体の小文字を識別し、文字の読み方に慣れ親しむ。 - アルファベットの文字クイズを出したり答えたりする。 - 相手に配慮しながらアルファベットの文字について尋ねたり答えたりしようとする。	アルファベットの文字をヒントに、単語当てクイズをする。
7 5単位 時間	What do you want? ほしいものは何かな？	- 食材の言い方や欲しい物を尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむ。 - 欲しい食材などを尋ねたり要求したり考えたメニューを紹介する。 - 相手に配慮しながら、自分のオリジナルメニューを紹介しようとする。	- 相手に勧めたいオリジナルメニューを作るために、買い物の場面で必要な食材についてやり取りをする。 - 作ったオリジナルメニューを見せながら紹介する。
8 4単位 時間	This is my favorite place. お気に入りの場所をしょうかいしよう	- 世界と日本の学校生活の共通点や相違点を通して、多様な考え方があることに気付くとともに、教科名や教室名の使い方に慣れ親しむ。 - 自分が気に入っている校内の場所に案内したり、その場所について自分の考えを伝え合ったりする。 - 相手に配慮しながら、自分が気に入っている場所について、自分の考えも含めて伝えようとする。	自分が気に入っている校内の場所についてイラストや写真を参考に自分の考えなどを伝えたり、その場所まで案内したりする。
9 5単位 時間	This is my day. ぼく・わたしの一日	- 世界の同年代の子供たちの生活の共通点や相違点を通して、多様な考え方があることに気付くとともに、日課を表す表現に慣れ親しむ。 - 絵本などの短い話を聞いて、おおよその内容が分かる。 - 他者に配慮しながら絵本などの短い話を反応しながら聞こうとする。	- 絵本の読み聞かせの中で聞いた、簡単な語句や基本的表現が表す内容をイラストなどを結び付ける。 - 話の筋に合わせて、気に入ったページをグループで発表する。

この年間指導計画例〔案〕では、児童が発話をする表現例・語彙例を記載している。

表現例	新出語彙・語句例	既出表現・語彙例	HFとの関連
Hello. Good [morning/afternoon]. I like (strawberries). Goodbye. See you.	morning, afternoon, world	Hello. I'm (Hinata). How are you? I'm (happy). I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. Goodbye. See you. 気持ちを表す語, 色, 数 (1-30), 飲食物, 野菜, スポーツ, 動物	1-L1 1-L4
How's the weather? It's [sunny/rainy/cloudy/snowy]. Let's (play cards). Yes, let's. Sorry. Stand up./Sit down./Stop./Walk./Jump./Run./Turn around.	天気 (weather, sunny, rainy, cloudy, snowy), hot, cold, 動作 (stand, sit, stop, jump, turn, walk, run, look, put), up, down, on, around, right, left, let's, play, hand, leg, 遊び (tag, jump rope, bingo, game), outside, inside, 衣類 (T-shirt, shorts, sweater, pants, raincoat, rain boots, gloves, boots)	Hello. Good [morning/afternoon]. I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. What (sport) do you like? Goodbye. See you. how, is, it, 身体の部位, 色, 動物, 飲食物, スポーツ	
What day is it? It's (Monday). Do you like (Mondays)? Yes, I do./No, I don't. I like (Mondays).	day, 曜日 (Monday, Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday, Saturday, Sunday), 野菜 (mushroom, watermelon), 飲食物 (soup, pie, sandwich), fresh	I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. What (sport) do you like? it, is, 色, 動物, 飲食物, スポーツ	1-L8 1-L4
What time is it? It's (8:30). It's (homework time). How about you?	time, 数字 (40, 50, 60), about, 生活時間 (wake up time, breakfast time, study time, lunch time, snack time, dinner time, homework time, bath time, bed time, dream time)	I like (blue). what, is, it, 数 (1-30), 曜日, スポーツ	2-L6
Do you have (a pen)? Yes, I do./No, I don't. I [have/don't have] (a pen). This is for you.	have, 文房具 (glue stick, scissors, pen, stapler, magnet, marker, pencil sharpener, pencil case), 身の回りの物 (desk, chair, clock, calendar), short	Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. What (sport) do you like? I like (soccer). (Card 'A'), please. How many (apples)? Ten (apples). big, small, long, short, 形, 色, スポーツ, 動物, 飲食物	2-L4
Look. What's this? Hint, please. How many letters? I have (six). Do you have (a 'b')? Yes, I do./No, I don't. That's right. Sorry, try again.	小文字 (a-z), letter, try, again, a.m., p.m., bookstore, coffee, closed, donut, exit, juice, news, off, open, police, post, popcorn, restaurant, sale, street, taxi, telephone	What's this? Hint, please. What do you want? (A star), please. How many (apples)? Do you have (a pen)? Yes, I do./No, I don't. I [have/don't have] (a pen). That's right. Sorry. up, down, left, right, look, 数 (1-60), 身の回りの物, 大文字 (A-Z)	2-L1
What do you want? I want (potatoes), please. How many? (Two), please. Here you are. Thank you.	野菜 (potato, cabbage, corn), cherry, meat, pork, beef, want	What's this? It's (a fruit). How many (apples)? Ten (apples). Do you have (a pen)? Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. I [have/don't have] (a pen). 野菜, 果物, 飲食物, 数 (1-60)	1-L6
Go straight. Turn [right/left]. Stop. This is (the music room). This is my favorite place. Why? I like (music).	favorite, place, my, our, why, 学校・教室 (school, science, music, cooking, arts and crafts, gym, playground, school nurse's office, principal's office, entrance, library, teachers' office, school office, classroom, computer room, girls' room, boys' room), straight, teacher, boy, girl	This is for you. I like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't. turn, right, left, スポーツ, 曜日	2-L4
I wake up (at 6:00). I eat breakfast (at 7:00). I go to school. I go home. I take a bath.	日課 (wash my face, go to school, go home, brush my teeth, put away my <i>futon</i> , have breakfast, check my school bag, leave my house, take out the garbage, take a bath, do my homework)	What time is it? It's (8:30). I, you, up, go, do, a, 数 (1-60), 動作, 曜日, 時間	2-L6 2-L7

4年生では、すべての単元を通じてアルファベットの文字とその読み方を扱うことを想定している。

1. 単元目標

- 多様な考え方があることや、外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付き、色の言い方や、好みを表したり好きかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。(知識及び技能)
- 相手に配慮しながら自分の好みを伝え合う。(思考力、判断力、表現力等)
- 相手に伝わるように工夫しながら自分の好みを紹介しようとする。(学びに向かう力、人間性等)

2. 言語材料

○ I like (blue). I don't like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do./No, I don't.

○ 色 (blue, red, green, yellow, pink, black, white, orange, purple, brown)

スポーツ (soccer, tennis, baseball, basketball, dodgeball, swimming)

飲食物 (ice cream, pudding, milk, orange juice)

野菜 (onion, green pepper, cucumber, carrot)

3. 該当する学習指導要領における領域別目標

聞くこと	イ ゆっくりはっきりと話された際に、身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味が分かるようにする。
話すこと (やり取り)	イ 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。

4. 単元計画(4時間)

時	目標(◆)と主な活動(【 】、○) *【 】=誌面化されている活動	◎評価<方法>
1	◆多様な考え方があることに気付くとともに、色の言い方に慣れ親しみ、好きなものを表す表現を知る。 ○Hello Song 【Activity】自分のにじをかこう「My Rainbow」 - 誌面に好きな色を塗り、自分の虹を完成させる。 【Let's Watch and Think ①】 - 映像資料を視聴し、世界の子供たちの描く虹の絵を見て、それぞれの違いに気付く。 ○シャッフル・ゲーム ○好きな色を教えて - 指導者が、自分の好きな色を挙げるなどして児童にも発話を促し、好きなものを表す表現に出合わせる。 【Let's Listen ①】 - 誰が何色を好きか聞いて線で結ぶ。 【Let's Chant】I like blue. (① 色編) ○Goodbye Song	◎多様な考え方があることに気付いている。〈行動観察、振り返りカード分析〉 ◎色を聞いたり言ったりしている。〈行動観察、振り返りカード点検〉

2	◆ 外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付くとともに、好みを表す表現に慣れ親しむ。 ○Hello Song 【Let's Sing】 The Rainbow Song ○カラー・タッチ・ゲーム ○先生の好きなものとそうでないものを知ろう ・指導者は自身の好きなものとそうでないものについて話し、児童がI [like / don't like] ~. の意味を分かるようにする。 【Let's Listen ②】 ・音声を聞いて登場人物の好きなスポーツや、そうでないスポーツの番号を書く。 ○Who am I? クイズ ・好きなものとそうでないものをヒントとして聞かせ、校内の先生の誰かを当てさせる。 【Let's Chant】 I like blue. (② スポーツ編) ○カード・デスティニー・ゲーム ○Goodbye Song
3	◆ 好きかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむとともに、相手に配慮しながら自分の好みを伝え合う。 ○Hello Song 【Let's Sing】 The Rainbow Song 【Let's Listen ③】 ・色やスポーツ、食べ物についての会話を聞いて登場人物の好きなものを○で囲む。 【Let's Watch and Think ②】 ・映像資料を試聴し、好みを予測して好きなものと嫌いなものに○と△を記入し、Do you like ~? と尋ねる。 ○○×クイズ (友達の好き嫌いについて) 【Let's Chant】 I like blue. (③ 質問編) 【Let's Play】 ・ペアになり、誌面の表に書かれているものなどについて好きかどうかを予想して尋ね合う。 ○Goodbye Song
4	◆ 相手に伝わるように工夫しながら自分の好みを紹介しようとする。 ○Hello Song 【Let's Sing】 The Rainbow Song 【Let's Chant】 I like blue. (① ~ ③) 【Activity】 ・自己紹介シートを作成し、自分の好みを交えて自己紹介をし合う。 ○Goodbye Song

◎英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付いている。〈行動観察、振り返りカード分析〉

◎好みを表す表現を聞いたり言ったりしている。〈行動観察、振り返りカード点検〉

◎好きかどうかを尋ねたり答えたりしている。〈行動観察、振り返りカード点検〉

◎相手に配慮しながら自分の好みを伝え合っている。〈行動観察、ワークシート・振り返りカード点検〉

◎相手に伝わるように工夫しながら自分の好みを紹介している。〈行動観察、ワークシート・振り返りカード点検〉

5. 単元・授業構成上の留意点

(1) 単元構成について

① ゴールの明確化と段階的な目標設定

単元を構成する際、まず大切となるのが、ゴールの明確化である。ゴールを明確にすることで、指導者自身が、終末で目指す児童の具体の姿、つまり単元を通して児童に身に付けさせたい力をイメージすることができ、目標の実現に向けての必要な手立ても見えてくる。ゴールが決まれば、そこから逆算して（バックワード・デザイン）1時間ごとの目標を定め、活動を組み立てながら単元を構成していく。その際の拠り所となるのが、目標に示された3つの柱（資質・能力）である。

本単元のゴールで目指す児童の姿は、「相手に伝わるように工夫しながら自分の好みを紹介している姿」（主体的に学習に取り組む態度）である。その目標達成に向けて、第1時では、「虹を描く」活動を通して多様な考え方があることに気付かせ、色を表す語に出合わせる。第2時には好みを表す表現に慣れ親しませ、第3時の自分の好みを伝え合う活動から、最終の自己紹介へとつなげている。つまり、言語活動は「聞くこと」中心の活動から「話すこと」へ、児童に過度な負担をかけることがないように、細かいステップを踏みながら段階的にゴールへ向かう構成となっている。

② 目標に沿った活動の選択と効果的な配列

ゴールとそこに至るまでの毎時間の目標が決まれば、次は、各目標に添って具体的な活動を選択し、時間配分や評価場面も考慮しながら配列を考える作業となる。例えば、本単元の第1時では、「多様な考え方があることに気付かせる」という目標に対して、「虹を描く」活動と「海外の児童の様子をデジタル教材で視聴する」活動を関連付けて組み込み、評価場면을設けている。もちろん、これは一例である。目の前の児童の実態に合わせて、活動の反応や意識の流れなどを具体的にイメージしながら、活動を選び、配列していくことが肝要である。

加えて、バランスも考慮したい。同じような活動ばかり扱うのでは、児童の興味・関心も低下し、育つ資質や能力の偏りが懸念される。活動の種類や活動形態、活動量等のバランスにも配慮して、児童が主体的に活動でき、目指す資質・能力が育つような単元構成に努めたい。

(2) 授業構成について

1コマ（45分）の基本的な流れは、〈(例) 挨拶→ウォームアップ／導入／復習→中心となる活動→振り返り→挨拶〉としている。まず、英語で挨拶し、外国語活動が始まる雰囲気をつくり、ウォームアップなどで緊張をほぐす。次に、中心となる活動へ移るが、1時間の活動においても、できれば聞く活動から、まねる活動、自ら発話する活動へと段階的に組み立てるとよい。

次ページ以降の指導案には、目標と準備物、児童や指導者の活動とともに、指導上の留意点、クラスルーム・イングリッシュ例なども示した。指導者は、毎時間の目標や評価、各活動のねらいを十分に理解して、指導に当たるようにしたい。

指導案

1/4時間

目標 多様な考え方があることに気付くとともに、色の言い方に慣れ親しみ、好きなものを表す表現を知る。

準備 デジタル教材……〔デ教〕、児童用テキスト……〔テキスト〕、教師用絵カード(色)……〔絵力〕、色鉛筆、
振り回りカード……〔振力〕

時間	児童の活動 *〔 〕= 誌面化されている活動	指導者 (T) の活動と使用英語例 ◎ 評価〈方法〉	準備物
2分	挨拶をする。	・全体に挨拶をして、個別にも挨拶をする。	
3分	○Hello Song	・児童と一緒に歌う。	〔デ教〕
10分	【Activity】 自分のにじをかこう「My Rainbow」 ・誌面の虹を自由に塗り、自分の虹を完成させる。	・What's this? クイズをしたり、誌面を指し What's this? などと尋ねたりして、「虹」という児童のつぶやきを拾い、「rainbow」の言葉を導入する。虹を見た時の様子などについても簡単に尋ねる。 ・自由に色を塗り、虹を完成させることを告げる。 T: Look at your textbook. Please color the rainbow. Please make your original rainbow. ・塗った色や順などを尋ね、色の言い方を何度も聞かせ、慣れ親しませるようにする。	〔絵力〕 〔テキスト〕 色鉛筆など
5分	【Let's Watch and Think ①】 ・映像資料で、世界の子供たちが虹を描く様子などを視聴し、自分たちの作品との相違点や共通点に気付く。	・海外ではどんな虹が見えるかなど、児童の興味・関心を高めながら映像資料の視聴につなげ、自分たちの作品との違いや共通点に気付くよう言葉かけをする。 T: Please watch the video. What colors can you see in the rainbow? Are they beautiful? ・どのような色で描かれているかを児童と確認することを通して、児童に色の言い方を繰り返し聞かせたり言わせたりして、色の言い方に慣れ親しませるようにする。 ◎多様な考え方があることに気付いている。〈行動観察、振り回りカード分析〉	〔絵力〕 〔テキスト〕 〔デ教〕
5分	○シャッフル・ゲーム ・指導者とともに色を確認する。 ・指導者が指したカードが何色が当てる。	・シャッフル・ゲームをすることを告げる。児童が描いた虹の色の中から4枚程度を黒板に張りながら、カードの色を児童と確認する。 T: Let's play the 'Shuffle Game.' Look at the board. This is ...? Yes, this is pink. This is ...? Right. This is blue. Watch the cards carefully. What color is this?	〔絵力〕
	〈活動の手順〉 ・児童と色を言いながら、順に色カードを裏返す。児童に入れ替えた順が分かるように2、3回入れ替える。 ・1枚のカードを指し、What color? と児童に尋ねる。 ・児童の答えに応じて、カードを表に返し、色を確認する。この活動を通して、児童に何度も色の言い方を聞かせたり、言わせたりして、慣れ親しませるようにする。		◎色を聞いたり言ったりしている。〈行動観察、振り回りカード点検〉
5分	○好きな色を教えて ・指導者の話を聞いて、好きなものを表す表現を知る。 ・指導者の質問などに応じて、色を言う。	・黒板にほかの色も加え、言い方を確認する。 ・自身の洋服などの色を指し示しながら、What color is this? I like ~. と好きな色を言い、好きなものを表す表現に出合わせる。黒板の色カードを指しながら児童にI like ~. Yes? No? などと投げかけ、発話を促す。児童の答えに応じて、児童を指してYou like ~. 自身を指してI like ~. と何度も繰り返して言い、児童にI like ~. You like ~. の表現を何度も聞かせるようにする。	〔絵力〕
4分	【Let's Listen ①】 ・誰が何色を好きかを聞いて線で結ぶ。	・何色が好きかを予想させ、それを確かめるために音声を聞かせるようにする。	〔テキスト〕 〔デ教〕
4分	【Let's Chant】 I like blue. (①色編)	・児童と一緒に言う。	〔デ教〕
5分	・本時の活動を振り返り、振り回りカードに記入する。	・児童の英語を使おうとする態度についてよかったところを称賛する。	〔振力〕
2分	○Goodbye Song ・挨拶をする。	・児童と一緒に歌う。 ・挨拶をする。	〔デ教〕

指導者

中核教員

現職教員

授業研究編

I

外国語活動

指導案

2/4時間

目標 外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付くとともに、好みを表す表現に慣れ親しむ。

準備 デジタル教材…〔デ教〕、児童用テキスト…〔テキス〕、教師用絵カード(色・スポーツ)…〔絵力〕、児童用小カード(色・スポーツ)…〔小力〕、菓子箱などの具体物、写真(校長先生など校内の教職員等)、振り返りカード…〔振力〕

時間	児童の活動 *【 】= 誌面化されている活動	指導者(T)の活動と使用英語例 ◎評価(方法)	準備物
2分	挨拶をする。	全体に挨拶をして、個別にも挨拶をする。	
3分	○Hello Song 【Let's Sing】The Rainbow Song	児童と一緒に歌う。	〔デ教〕
6分	○カラー・タッチ・ゲーム - 指導者が言った色をタッチする。 - 代表の児童が指導者役を行う。	- Touch something [blue/red/brown]. などと言って、周囲にある色をタッチする。児童も色を探してタッチするよう促す。これを数回繰り返し、児童に色の言い方を思い出させるようにする。その際、黒板に色カードを張っていく。 T: Where is 'blue'? Oh, your T-shirt is blue. - 児童が慣れてきたら、テンポよく Touch something ~! と言い、児童に色の言い方を十分聞かせるようにする。慣れてきたら、児童に指導者役をさせる。	〔絵力〕
6分	○先生の好きなものとそうでないものを知ろう 指導者の好きなもの、そうでないものについて話を聞く。	児童の好きそうな菓子や、キャラクターのイラストなどを示しながら、自身の好きなもの、嫌いなものを I [like/don't like] ~. を使って紹介する。その際、一方的に紹介するのではなく、児童に Do you like ~? と尋ねたり、その答えに応じて You [like/don't like] ~. と返したりして、第3時につながるようにする。	〔絵力〕 菓子箱などの具体物
	〈活動の手順〉 - 黒板に ♥ (likeを表す) と ♥ (don't like) を描き、色カードや菓子箱、包装紙等を見せ、児童に Do you like ~? と尋ね、Yes? No? などとジェスチャーで示しながら手を挙げさせる。 - 指導者は、それについて I [like/don't like] ~. とジェスチャーを付けて言い、児童に好きかどうかを予想させる(手を挙げさせてもよい)。 - ジェスチャーを交え、I [like/don't like] ~. と正解を言って、♥や♥の下に、それを表すカード等を張る。アニメキャラクター等についても同様にし、I [like/don't like] ~. の表現に出合わせ、その意味を理解させるようにする。		
6分	【Let's Listen ②】 音声を聞いて、登場人物の好きなスポーツや好きでないスポーツの番号を書く。	- 登場人物の好きなスポーツや好きでないスポーツを聞いて番号を書かせる。その際、いきなり音声を聞かせて活動させるのではなく、音声を聞かせる前に、どの登場人物が何を好きかを予想させ、自身の予想が合っているかを確かめるために音声を聞くというような場面設定をする。 T: Look at your textbook. This is 'soccer.' Do you like soccer? This is 'baseball.' Do you like baseball? Yes? Good. Please listen. - スポーツの言い方を再度聞かせ、児童に繰り返させながら、音声の違い等に気付かせるようにする。児童に繰り返させる際には、指導者も一緒に言い、語のイントネーションを手の上下で示すなどして、音声だけではその特徴をつかみにくい児童も音声の違いに気付きやすいようにする。 ◎英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付いている。 〈行動観察、振り返りカード分析〉	〔テキス〕 〔デ教〕 〔絵力〕

6分	○Who am I? クイズ ・ ヒントを聞いて誰かを当てる。	- Who am I? クイズをすることを告げる。校長先生や教職員の写真を黒板に張りながら、それが誰かを確認する。 - 校内の先生になりきって、I like ～. と I don't like ～. (色、スポーツ等) を使って好きなもの、嫌いなものを言い、それが誰かを当てさせる。	絵力 写真
3分	【Let's Chant】 I like blue. (② スポーツ編)	児童と一緒に言う。	デ教
6分	○カード・デスティニー・ゲーム	カード・デスティニー・ゲームをすることを告げる。 T: Let's play the 'Card Destiny Game.' Are you ready? The first card is 'red'! Who has the 'red' card? Please say, "I like red." or "I don't like red." And put the 'red' card down on your desk. 〈活動の手順〉 2人組になり、色とスポーツの絵カード10～12枚を適当に分けて持つ。指導者も同じカードを持ち、その中から1枚引いて、“Soccer!”等と言う。言われたカードを持っている児童は、I [like / don't like] ～. と自分の気持ちを言いながらカードを机に置く。手持ちのカードがなくなったら上がり。 ◎好みを表す表現を聞いたり言ったりしている。 〈行動観察、振り返りカード点検〉	小力
5分	本時の活動を振り返り、振り返りカードに記入する。	児童の英語を使おうとする態度についてよかったところを称賛する。	振力
2分	○Goodbye Song ・ 挨拶をする。	- 児童と一緒に歌う。 - 挨拶をする。	デ教

指導案

3/4時間

目標 好きかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむとともに、相手に配慮しながら自分の好みを伝え合う。

準備 デジタル教材…デ教、児童用テキスト…テキスト、
教師用絵カード（色・スポーツ・食べ物・野菜）…絵力、振り回りカード…振力

時間	児童の活動 * [] = 誌面化されている活動	指導者 (T) の活動と使用英語例 ◎ 評価 (方法)	準備物
2分	挨拶をする。	全体に挨拶をして、個別にも挨拶をする。	
3分	○Hello Song 【Let's Sing】 The Rainbow Song	児童と一緒に歌う。	デ教
7分	【Let's Listen ③】 ・会話を聞いて、登場人物の好きなものを○で囲む。	- 誌面で扱われている色、スポーツ、食べ物の絵カードを見せながら、それが好きか嫌いかを言い、児童にそれが好きかを尋ねる。児童に Yes? / No? とさらに尋ね、児童の答えに応じて、黒板に描いた♥、♥の下にその絵カードを張っていく。この活動を通して、Do you like ~? が好みを尋ねていることを分らせるようにする。さらに、数名の児童に Do you like ~? と絵カードを見せながら尋ね、理解を深めて 【Let's Listen ③】 につなげる。 - 登場人物が好みを尋ね合う会話を聞いて、誌面の表に○を記入する。（色・スポーツ・食べ物） T: Let's listen. Please write a circle in the box.	デ教 絵力 テキスト
7分	【Let's Watch and Think ②】 ・登場人物が好きかどうかを予想して好きなものに○、嫌いなものに△を記入し、Do you like ~? と尋ねる。	- スポーツ、食べ物等の英語を言いながら（デジタル教材を聞かせてもよい）、その絵カードを黒板に張る。その際、児童と一緒に言うように促したり、児童に絵カードの一部を見せてそれが何かを尋ねたりしながら張るとよい。 T: What's this? A carrot? That's right. - 登場人物の好みを予想して誌面のイラストに○や△を記入させる。画面に出ている登場人物に向かって、好きかどうかを全員で尋ね、自身の予想と合っているかどうかを確認させる。この活動を通して、Do you like ~? Yes, I do. / No, I don't. の表現に慣れ親しませるようにする。 T: Let's ask together. Do you like ~?	デ教 絵力 テキスト
10分	○×クイズ ・友達に好き嫌いを尋ねる。	代表の児童 (S1) を前に出す。前の活動で使用した絵カード等を使い、何について尋ねるかを S1 以外の児童と相談して決め、好みを予想する。その後、全員で Do you like ~? と児童 (S1) に尋ね、予想と合っているかどうかを確認させる。 T: Please guess if S1 likes blue or not. Everyone, let's ask S1 together. ◎好きかどうかを尋ねたり答えたりしている。（行動観察、振り回りカード点検）	絵力
2分	【Let's Chant】 I like blue. (③ 質問編)	児童と一緒に言う。	デ教
7分	【Let's Play】 ・友達の好き嫌いを予想してインタビューする。	- ペアになり、誌面の表に描かれている色やスポーツなどについて、好き嫌いを予想して○△を記入させる。 - 互いに尋ね合い、予想と合っているか確認させる。 T: Please make pairs. Please guess if your partner likes this or not. Please write a circle or a triangle in the box. Please ask each other. ◎相手に配慮しながら、自分の好みを伝え合っている。（行動観察、振り回りカード点検）	テキスト
5分	・本時の活動を振り返り、振り回りカードに記入する。	児童の英語を使おうとする態度についてよかったところを称賛する。	振力
2分	○Goodbye Song ・挨拶をする。	- 児童と一緒に歌う。 - 挨拶をする。	デ教

指導案

4/4時間

目標 相手に伝わるように工夫しながら自分の好みを紹介しようとする。

準備 デジタル教材…〔デ教〕、児童用テキスト…〔テス〕、ワークシート…〔WS〕、
教師用絵カード(色・スポーツ・飲食物・野菜)…〔絵力〕、色鉛筆、振り返りカード…〔振力〕

時間	児童の活動 *〔 〕= 誌面化されている活動	指導者 (T) の活動と使用英語例 ◎ 評価〈方法〉	準備物
2分	挨拶をする。	• 全体に挨拶をして、個別にも挨拶をする。	
3分	○Hello Song 【Let's Sing】The Rainbow Song	• 児童と一緒に歌う。	〔デ教〕
2分	【Let's Chant】I like blue. (①～③)	• 児童と一緒に言う。	〔デ教〕
8分	【Activity】 • 自己紹介シートを作成する。	• 好きなものや好きでないものを絵や言葉で表して、児童一人一人に自己紹介シートを作成させる。 T: What do you like? What color do you like? Please draw your favorite things on your worksheet.	〔WS〕 色鉛筆
23分	• 自分の好みを交えて自己紹介をし合う。 Hello. I'm ~. I like ~. I don't like ~. (Do you like ~?) Thank you.	• 4、5人のグループを作り、1人ずつ自己紹介する。(学級の数や実態に応じて形態を変える) T: Please make groups of four or five. Please make a speech about yourself. I'm ~. I like ~. I don't like ~. OK? • 途中で中間評価を行うなどして、活動がねらいにそったものとなるようにする。 • 代表者数名に全体の前で発表させる。 ◎相手に伝わるように工夫しながら自分の好みを紹介している。 (行動観察、振り返りカード点検)	〔デ教〕 〔絵力〕 〔WS〕
5分	• 本時の活動を振り返り、振り返りカードに記入する。	• 児童の英語を使おうとする態度についてよかったところを称賛する。	〔振力〕
2分	○Goodbye Song • 挨拶をする。	• 児童と一緒に歌う。 • 挨拶をする。	〔デ教〕

指導者

中核教員

現職教員

授業研究編

I

外国語活動

授業研究の視点① 児童の興味のある題材の選定

学習の主体は児童である。児童が興味をもち、思わず「聞きたい」「やってみたい」と身乗り出すような場面を授業の中に設定することが、児童の能動的な学びを促すと考える。そして、こうした児童の姿が実現する授業づくりには、児童の心を動かし意欲を喚起するような、「題材の選定」が重要な要素の1つとなる。ここでは、3年生「Unit4 I like blue. すきなものをつたえよう」(p.36-43)」について、具体例を挙げながら解説する。

1 「好きなもの」

3年生の発達の段階を考えると、まだまだ自己中心的な側面があるものの、徐々に友達関係が深まる時期である。そうした実態や活動の実施時期等を考慮し、題材を「好きなもの(自己紹介)」とした。普段の生活においても、テレビ番組や食べ物など、様々なことに関して互いの好き嫌いを伝え合う場面は多く、児童にとって身近で関心のある題材であると思われる。

児童は、これまでの外国語活動の中で、名前を言ったり、体調や数を尋ね合ったりしてきているが、本単元で、初めて、「自分の考えや気持ち」を伝え合うことになる。そこで言語材料には、児童にとって身近な色やスポーツ、食べ物等を扱い、簡単な表現でのやり取りとしている。そのため、過度な負担を感じることなく楽しくコミュニケーション活動が体験できると考える。

また、もっとも身近な友達に「自分のことを知ってもらう」ことは、児童にとって大変嬉しいことであり、思いを伝えることにも一層意欲が高まるであろう。本単元が、自分や友達への理解を深め、一人一人が大切な存在であるという「自己肯定感」を高め、「他者理解」を深めるきっかけになることも期待している。

2 「虹」

本単元、第1時の目標は、「多様な考え方があることに気付くこと」と「色の言い方に慣れ親しむこと」である。その目標を達成するため、活動で扱う題材に「虹」を選んだ。理科の学習がスタートし、様々な自然現象について学ぶ機会が増える3年生の児童にとって、「虹」は、より身近なものになると思われる。また、単色ではなく多色で構成された「虹」を題材にすることで、より多くの表現に出合える良さもある。虹を題材とした2つの活動を取り上げる。

(1) 自分のにじをかこう「My Rainbow」【第1時】

“Please make your original rainbow.”「自分だけの虹を完成させよう」という指導者の声に、児童は思い思いの色を取り出し、夢中になって塗り始めるだろう。ペアやグループ活動など様々な活動形態があるが、3年生の発達の段階を考えると、時にはこうした個人の性格やペースに合わせた活動を組み込むことも効果的である。さらには、完成した全員の「虹」を教室の壁面や黒板に掲示し、それぞれの作品について話し合う時間をもつのもよい。それぞれの違いやよさを知り、互いを認め合うことの大切さを学ぶ機会となり、次の活動への意欲付けにもなる。

(2) 【Let's Watch and Think ①】【第1時】

児童は、Unit1で海外の子供たちと出会い、様々な国の挨拶を知った。そして、自分たちの生活と比較しながら、ジェスチャーや数の数え方などについても体験的に理解を深めてきている。そうしたことから、この場面で、世界の子供たちが描く虹を視聴することは、児童にとって大変興味深く、他の国や地域への

関心を一層高めるきっかけになると考える。

すでに自分だけの「虹」を完成させている児童は、同じ年代の世界の子供たちの様子に自分の姿を重ね合わせながら映像を観るだろう。そして、自分たちがそうであるように、海外の友達一人一人の虹の描き方も違っていることに気付き、物事の捉え方は多様であることを実感する機会となる。ただし、それらはあくまでも個人の差異であることをおさえ、「〇〇という国では、虹を〇色で描く」といった「ステレオタイプ」的な理解とならないよう十分配慮したい。

3 「身近な人」

3年生の児童にとっての身近な存在と言えば、家族や友達、学校の先生であろう。そこで、本單元では、好みを表す表現を導入し、慣れ親しませるための活動の題材として、教職員や友達を扱う。

(1) 「Who am I? クイズ」 [第2時]

第2時では「好みを表す表現に慣れ親しむ」ことが目標の1つである。そこでまず、表現をしっかり聞いて慣れさせるために、「Who am I? クイズ」を行う。児童は、課題（誰かを当てる）解決のために、ヒントとなる（好みを表す）表現を一生懸命集中して聞くであろう。さらに、対象となる題材が、児童の興味・関心に沿ったものであれば、活動への意欲も一層高まる。

ここでは、校長や教頭、前年度の担任等、児童にとって馴染みのある教職員を扱うようにしている。関わりが深ければ、その好みなどについても児童はよく知っているため、ヒントを頼りにそれが「誰か」を一生懸命推測するであろう。“I like dogs.”などと、ヒントを1つ聞くだけで、ある教員を思い浮かべたり、担任の知らなかった一面に驚いたりして、積極的に活動する児童の姿が期待できる。また、活動を通して、繰り返し表現を耳にするうちに、知らず知らずのうちに好みを表す表現に慣れ親しんでいく。

(2) 「〇×クイズ」 [第3時]

第3時では、「好きかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、自分の好みを伝える」ことが目標となる。“Do you like ~?”という表現に聞き慣れた後、いよいよ発話する場面で、「〇×クイズ」を扱う。ここでは、児童にとってもっとも身近な「友達」が題材となる。

教室の前に立った代表の児童に、何について尋ねるかを決め、その好き嫌いについて予想する。そして、予想が合っていたかどうかを確かめるために、全員で“Do you like ~?”と尋ねる。自分たちと毎日一緒に過ごす「友達」が対象となるからこそ、児童は、「何を尋ねよう」「〇〇さんは、好きだと思う」などと、嬉々として活動に取り組むことが予想される。よく知っている友達だからこそ、児童は、知りたくなり、聞きたくなるのである。そこには活動の必然性が生まれる。活動を通して、児童は友達の新たな一面を知り、理解を深める機会にもなるであろう。

題材は、児童の生活場面や学習場面に関わりのあること、つまり、児童がこれまでに意識的にも無意識的にも、普段見たり聞いたりしてきた「もの」・「こと」・「人」などから、児童の興味・関心に沿ったものを選ぶことが大切である。そのためにも、指導者側には、深い児童理解が求められる。目の前にいる児童をよく見つめ、どのようなことに興味をもち、どのようなことをやってみたいと思っているかなど、日ごろの様子や他教科等の学習活動を通して十分に把握しておくことが重要となる。

授業研究の視点② 聞く必然のある活動

初めて外国語に触れる3年生段階では、「話すこと」を早急に求めず、聞く活動を十分に取り入れる必要がある。また、聞く活動を扱う際には、特に「場面設定」と「聞かせる内容」に留意したい。児童が思わず聞きたくなるような、聞かなければ課題解決に向かえないような、「聞く必然性のある」場面を意図的につくること、さらには、児童の興味関心に即した「意味のある内容」を聞かせることが、学習指導要領に挙げられた目標達成につながるのである。

本単元 (Unit4 I like blue.) の「聞くこと」の領域別目標は、「ゆっくりはっきりと話された際に、身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味が分かるようにする」となっている。その目標に向かって、語彙や表現と「出会い」、「慣れ親しみ」、最終的には「活用」へと、ねらいに応じた指導を丁寧に進めることが肝要である。ここでは、本単元で扱った「聞く活動」について主なものを挙げ、そのねらいと指導上の留意点等について述べる。

1 語や表現と出会う 「自分のにじをかこう My Rainbow」[第1時]

単元終末の活動への見通しをもたせ、「面白そう」「やってみたい」という意欲付けを図る上で、導入は大きな鍵を握る。「好きな色を塗って虹を完成させましょう」などと、いきなり誌面を見せて指示するのでは、児童の気持ちの高まりはあまり期待できない。そこで、指導案 (p.39) に示したように、児童と指導者がインタラク션을図りながら、「虹」、「色」の語を導入する方法が考えられる。例えば、担任1人で、もしくはALT等とともに、クイズ形式で次のように行う。

ALT: Everyone, It's quiz time. (「?」の付いた封筒に虹の写真を入れておく)

HRT: What's this? (ALTの持っている封筒を指す)

ALT: It's a secret. (ジェスチャーを交えて)

HRT: (児童に向かって) みんな、何だと思う? ヒントを出してもらおうか。Hint, please!

ALT: OK! I'll give you some hints. OK?

Sky. (空を指す) Big. (ジェスチャーで「大きい」を示す)

Red... (児童に親しみのある色をいくつか言う。教室にある色を指し示してもよい)

HRT: Sky? Big? Red? (ジェスチャーをしたり英語を繰り返したりして、児童の理解を助ける)

指導者は、ゆっくり、明瞭な声で、こうしたやり取りを行い、児童から「虹」という言葉を引き出し、写真やイラストを見せながら、“rainbow”という言葉に出合わせるのである。その後、虹との思い出やエピソード等を思い起こさせながらイメージを膨らませ、活動への意欲を喚起し「虹を描く」活動へとつなげる。完成した児童の虹をもとに、色を表す英語を導入するといった流れである。

これは、導入の一例であるが、効果的な「聞く」活動となるための、3つのポイントが含まれている。まず、児童に「何だろう」「知りたい」という目的意識をもたせて「聞く必然性」を高めた点である。児童は、何とか手がかりを見つけようと指導者の話に耳を傾けるであろう。2つ目は、意味のある内容を繰り返し聞かせ、ジェスチャー等の非言語の要素を手がかりにしながら、「なんとなく分かった(類推できた)」という喜びや達成感を児童が得られるよう配慮した点である。3つ目は、自然な会話の中から児童にとって身近な場面を設定し、新しい語を導入している点である。

児童の生活と関連付けながら「言葉」と出合わせることが、以降の活動への動機付けにつながる。

2 慣れ親しむ 【Let's Listen ①】 登場人物と好きな色とを線で結ぶ【第1時】

第1時後段に設定されている【Let's Listen ①】は、“I like red.”などと、好きな色を表す音声を聞いて、登場人物と色とを線で結ぶ活動である。音声を何度も聞き、語や表現に十分慣れ親しむことが、児童の「話したい」という意欲につながっていく。そういった意味で大切な活動ではあるが、ともすれば機械的な練習になってしまうことが懸念される。そこで、指導者は“Do you like red?”などと児童とやり取りするなどして意欲付けを図り、集中してしっかり聞けるよう配慮する必要がある。

まず、大切になるのが、**1**でも述べた、「聞く必然性」である。いきなり音声を聞かせて線を引かせるようなことは避けたい。児童の中に、興味をもって「聞こう」とする態勢が整っていないからである。3年生の発達の段階を考慮すると、音声を聞かせる前に、誌面の登場人物について話し合ったり、好きな色を予想させたりして、登場人物を児童にとって身近なものにしておく必要がある。その後、「予想は合っているかな。Listen carefully.」などと課題意識をもたせ、しっかり音声を聞かせるのである。

次に、留意したいことは、児童に「聞けた」「分かった」という喜びや達成感をもたせることである。そのため、児童の様子をよく観察し、音声を途中で止めたり、“One more time?”などと問いかけ、数回聞かせたりするなどの配慮が必要である。新しく出会った英語が聞き取れた喜びが、自信や意欲の向上につながる。

3 活用する 「Who am I? クイズ」【第2時】

第2時に組み込んだ「Who am I? クイズ」は、英語を聞かせるなどしてヒントを与え、それが誰かを推測させる活動である。児童は、「誰か」を当てるために、ヒントとなる英語を一生懸命に集中して聞こうとする。しかも、児童にとって身近な学校の教員が題材となることで、児童の興味・関心は一層高まるであろう。また、そこには、おのずと「聞く必然性」も生まれ、聞いた英語を手がかりに、それを活用して課題解決に向かう体験ができるのである。

例えば、まず、教員数名の写真を黒板に張る。児童は、歓声をあげながら「〇〇先生だ!」などと言うことが予想される。そこで、すかさず、写真を入れた封筒を児童に見せ、“Who am I?”と言う。さらに、ジェスチャーを交え、「〇〇先生?」「△△先生?」と黒板の写真を指せば、児童は、クイズの趣旨を十分理解できる。続けて、ゆっくり聞き取り易い声で、“I like blue.” “I like soccer.”などと、前時から慣れ親しんできた表現を聞かせ、どの先生のことかを考えさせる。児童は、様々な先生の姿を思い浮かべながら興味をもってヒントを聞くだらう。聞いたことに対して、児童が日本語で反応することもあるが、それは、しっかり聞いていることの表れである。

ここで重要なのは、すべてを聞き取り理解することを求めるのではなく、1つでもよいので、聞き取った英語を手がかりに内容を類推しながら「分かった」という経験をさせることである。



3つの活動を取り上げ、そのねらいや留意点等について述べたが、共通していることは「聞く必然性」の大切さである。指導者がいくら「聞きましょう」と言っても、児童が「聞きたい」と思わなければ真の意味で活動のねらいは達成できない。言葉かけや題材、場面設定などに配慮し、児童の興味を引き、しっかり聞かせ、語や表現に慣れ親しませるようにしたい。

さらに重要なことは、単なる知識として言葉を与えるのではなく、児童の身近な生活やコミュニケーション場面と関連付けて語や表現と出合わせることである。そうした出会いが、積極的な言葉の活用や主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながるのである。

授業研究の視点③ 話す必然のある活動

本単元 (Unit 4) の「話すこと」の領域別目標は、「自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする」(やり取り)であり、この目標の実現を目指した指導を通して、単元指導計画に示した3つの単元目標 (p.36) の達成を図る。

最終目標は、「相手に伝わるように工夫しながら自分の好みを紹介しようとする」(主体的に学習に取り組む態度)であるが、「聞くこと」同様、このゴールに向けて、第1時から段階を踏んだ丁寧な指導を進める必要がある。前節で述べたように、早急に「話すこと」を求めることは避けなければならない。「聞く」活動を十分に行った上で、まねをして言い慣れる「口慣らし」の段階から、「慣れ親しませ」「活用させる」段階へと、無理なく活動のねらいや内容を高めていくようにする。

1 口慣らし

【Let's Chant】「シャッフル・ゲーム」【第1時】

「話すこと」への第1段階として、まずまねて、語や表現を言い慣れる活動を取り入れる。本単元では、【Let's Chant】(チャンツ)や「シャッフル・ゲーム」がそれに当たる。

チャンツは、何度も繰り返し練習することができるので「慣れ親しみ」への初期段階としては、大変有効な活動である。自然な発音やイントネーション、リズムに慣れること、声を出すことへの心理的なハードルを下げるといった利点もある。特に、デジタル教材等を活用すると、イラストや動画が表現理解の助けともなり、児童も楽しみながら活動できる。(p.105、実践編「10 歌・チャンツの活用」参照)

「シャッフル・ゲーム」は、児童が色の言い方と初めて出会う、第1時に組み入れた活動である。まず、児童の虹の作品から数種類の色を取り出し、表現を一緒に言いながら色カードを黒板に張る。その後、色カードを裏に向け、順を入れ替え、指導者が1枚のカードを指して“What color?”と児童に尋ね、答えを引き出すのである。児童は、何色かを当てたいという思いで、“Blue!”などと言う。そこには、おのずと「話す[言う]必然性」が生まれ、「話し[言い]たい」という児童の気持ちも高まるであろう。さらに、繰り返し活動を行う中で、児童は何度も色の言い方を聞いたり言ったりすることができる。

与えられた語や表現を、何度も単純に復唱する機械的な繰り返し練習ばかりでは、児童の意欲を減退させる恐れがある。しかし、この活動のように、児童の中に目的意識が働き、自ら語を選択して発話する場面をつくることで、児童の意欲も高まり、慣れ親しんだ語や表現を活用しようとする主体的な態度の育成につながると考える。

2 慣れ親しむ

【カード・デスティニー・ゲーム】「〇×クイズ」【第2時・第3時】

この段階になると、児童は表現の意味を意識しながら発話する。楽しく活動しながら、表現の意味を体験的に理解させ、慣れ親しませることを目指す。「口慣らし」の活動と比べ、思考する場面もあるため、児童の意欲も一層高まるであろう。本単元では第2時の「カード・デスティニー・ゲーム」、第3時の「〇×クイズ」などがそれに当たる。

「カード・デスティニー・ゲーム」は、好みを表す表現 (I [like/don't like] ~.) に慣れ親しませる活動であるが、ルールも簡単で偶然性があり、児童も積極的に参加できると考える。活動はペアで行い、児童用絵カード(色やスポーツ)を同数ずつ分けて持つ。指導者も同じ絵カードを持ち、その中から1枚を選び、“Soccer!”などと言う。言われたカードを持っている児童は、自分の好み (I [like/don't like] ~.) を言

いながら手持ちの絵カードを机に置いていく。こうすることにより、児童が好きかどうかを選択して発話する「話す[言う]必然性」が生まれるのである。もしこの段階で、児童が表現を選択してすぐ発話することが難しい場合は、“I like ~.”か“I don’t like ~.”のいずれかの表現を決め、言い慣れる練習として行うことから始めるとよい。無理を強いないように、児童の実態に合わせた柔軟な指導方法の工夫が重要である。

「〇×クイズ」は、第3時の後半、友達とのインタビューの前に行う活動である。前段の活動で好きかどうかを尋ねる表現を知り、本クイズでさらに言い慣れる。代表で前に出た友達について、あるものが好きかどうかを予想し、全員で“Do you like ~?”と尋ね、予想が合っているかどうかを確認する活動である。この活動では、児童の「話し[言い]たい」という意欲がさらに高まると思われる。それは、題材が、児童にとってもっとも身近な「友達」であることと、予め答えを予想しているため、「答えはどちらだろう」と、友達に尋ねる必然性が生まれるからである。こうした活動を通して、児童は言葉のもつ力やその言葉の意味を体得したり、コミュニケーションの楽しさを実感したりしていく。なお、この活動は、全員で尋ねることに意味がある。一緒に言うことで、初めての発話であっても抵抗感が軽減されるからである。そして、何度も繰り返すうちに自信が生まれ、それがインタビュー等の次の活動につながる。

3 活用する

【Let's Play】インタビューしよう 【Activity】自己紹介をしよう【第3時・第4時】

第3時と第4時に「活用する活動」を組んでいる。この段階は、これまでに慣れ親しんできた語や表現を活用して、タスク(課題)を解決する体験の場となる。指導者から与えられたものではなく、それぞれの児童が相手意識・目的意識をもち、本当に「話したい」内容を選択できるため、自ずと意欲も高まり、コミュニケーションすることや話すことの楽しさを実感させることができる大切な活動である。「友達の好き嫌いを予想してインタビューする」と「好みを交えて自己紹介する」がそれに当たる。

しかし、個人の活動となるため、事前にしっかり表現に慣れ親しませておくことはもちろんのこと、指導者の細やかな配慮が必要となる。間違いを恐れるあまり消極的になったり、緊張から間違えたり、表現があいまいになったりすることなども想定されるからである。ここで、指導者が心がけるべきもっとも大切なことは、「間違いを決して否定しないこと」である。個に応じた支援もしつつ、「話そう[言おう]」とする意欲や態度をしっかり認め賞賛し、どの児童にも「話せた[言えた]」という喜びや達成感を味わわせたい。こうした積み重ねが、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育んでいく。



「話すこと」には、練習を繰り返し慣れ親しむ段階が必要である。しかし、それだけでは、目指す資質・能力の育成につながらない。「話す[言う]必然性」のある場の設定が、極めて重要である。与えられたものでなく、児童自らが思考し主体的に言葉を発する喜びを体験させたい。そうした経験の積み重ねが、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢につながる。

次に大切なことが、授業環境である。教室に「間違えても大丈夫」という雰囲気をつくっておくことである。それは学級の仲間づくりが基盤となるが、指導者の姿勢も大切となる。指導者自らが英語を使おうとするモデルとなり、児童とともに学ぶ姿を見せることが、児童に安心感を与えるのである。

授業研究の視点④ 他教科等と連携した活動

3年生といえば、理科や社会科の学習が始まり、音楽科でリコーダーでの演奏が始まるなど、低学年にはなかった新しい活動も増え、新たな気持ちで学習に取り組むことができる時期である。初めて経験する外国語活動との出会いも大切にしたい。そのためには、児童の興味・関心、実態を踏まえた、知的好奇心を満足させるような外国語活動の時間を創造する必要がある。そこで、年間指導計画作成に当たっては、1年間の学習内容を見通し、他教科等との関連を図ることが大切である。(p.103、実践編「9 他教科等と連携した指導の在り方」参照)

ここでは、本単元 (Unit 4) の中から、他教科等との連携によりさらに効果が高まると思われる活動を挙げ、そのねらいと指導上の留意点等について述べる。

1 図画工作科との連携

自分のにじをかこう「My Rainbow」[第1時]

図画工作科で彩色する際、低学年で扱う画材の中心はクレヨンであったが、3年生からは主に絵の具を使用する。児童はクレヨンにはない混色による色の変化に興味をもち、筆を使って彩色することを楽しみながら取り組むであろう。そこで、例えば、本単元第1時に設定している「虹をかく」活動を、図画工作科の時間を活用して行うことが考えられる。絵の具を使って画用紙に伸び伸び描くことで、児童のイメージは広がり、意欲も一層高まるであろう。その作品を外国語活動で使用し、指導者は児童一人一人の虹を見ながら、“Wow, this is a beautiful rainbow! Red, blue, orange...”のような声かけをする。時間をかけて自分だけの色を作った経験があるからこそ、無理なく音と色が結び付き、色を表す語との出会いがより印象深いものとなるだろう。また、「この色は英語で何て言うのかな」「ほかの色も作ってみたいな」と児童の興味はさらに広がり、外国語活動での学びが図画工作科の中に生かされることも期待できる。

2 国語科との連携

(1)【Let's Watch and Think ①】[第1時]

第1時には、映像資料を視聴し、世界の子供たちの描く虹の絵を見る活動が設定されている。ここでは国語科の詩と関連させることが可能である。例えば「みんなちがって、みんないい」というメッセージが込められた『わたしと小鳥とすずと』(金子みすゞ)という詩がある。友達や世界の子供たちの描いた虹に触れ、多様な考え方に気付くという本単元の活動とそれらを関連させることにより、さらに学びが深まるであろう。

(2)【Let's Play】[第3時]【Activity】[第4時]

3年生の国語科には、よい聞き方、よい話し方を育成するための単元が設けられている。そこでは互いの意見の違いや共通点を考えながら話し合い、話し手からより多くの話を引き出す聞き方や、相手に伝わりやすい話し方について指導を行う。そうした国語科での体験や学びを想起させ、指導者が意図してインタビュー等の活動に関連させることで、本単元の目標達成につなげることができると考えられる。

3 音楽科との連携

3年生の音楽科では、『うさぎ』(日本古謡)、『ふじ山』(文部省唱歌)のように、古くから歌い継がれてきた日本の歌の美しさを知るとともに、世界の音楽にも触れる。様々な国の音楽を聴いたり歌ったりしてそ

の多様性を感じることで、異文化理解が深まると考えられる。また、本単元で扱う「虹」を題材とした曲を歌ったり、リコーダーで演奏したりすることもできるだろう。自然の美しさや豊かさを感じながら表現した経験が、児童の関心を高め、外国語活動にもより意欲的に取り組むきっかけとなることが期待できる。

4 その他

(1) 人権教育

外国語活動で扱う題材は、人権教育とも深く結び付いており、活動自体が「自己肯定感」を高めたり、「自己理解」「他者理解」を促したりする体験的な場ともなる。例えば、本単元の、「友達の好みを聞き、自己紹介をし合う」活動がそれに当たる。活動を通して、児童は自分や友達の新たな一面を発見したり、互いの違いを実感したりするであろう。他方、道徳、学級活動の時間には、人権学習として、自分や友達のいいところを見つけ、互いを認め合うことの大切さについて学ぶ学習が行われることがある。こうした活動を連携させるのである。そうすることにより、学んだことが具体的な活動や体験とつながり、より確かなものとなっていく。

(2) 国際理解に関する活動

外国語活動以外にも、学校行事や総合的な学習の時間、特別活動等の時間に外国の方を招いての「国際交流」の機会を設けることが考えられる。交流活動の中では、本単元で経験した自己紹介の他、ゲストの方と英語で会話をする時間を設定するとよい。児童は外国語活動での経験を生かし、知っている英語やジェスチャー、表情を駆使してコミュニケーションを図ろうとするだろう。「相手の言っていることが分かった」「自分の思いが伝わった」という体験を通して、実際に生きた英語を使うことの喜びと楽しさを味わうことができる。学校の実態により、国際交流活動が難しい場合もあるが、可能な範囲で外国の方とのコミュニケーションを体験させるとよい。そのことにより、児童にとって英語がさらに身近なものとなり、外国語活動へのより積極的な参加につながるのである。

(3) 読書の時間

多くの学校では朝や昼の短時間学習を利用して、読書の時間を設けていると考えられる。学級担任や図書館司書、保護者、地域のボランティアによる絵本の読み聞かせの機会を設定している学校もある。本単元を導入する前には、「虹」や「好きなもの」に関連した絵本の読み聞かせをする時間を設けるとよい。また、関連した絵本を学級文庫として教室に保管し、読書の時間や休み時間に児童が自由に手に取れるような工夫も望ましい。



本節で取り上げたような、外国語活動と他教科等との関連を図った活動は様々考えられる。横断的なカリキュラムを組むことで、他教科等で得た共有体験や知識を生かすことができるため、児童の意欲も高まり、外国語活動で扱う内容にも深まりが生まれる。また、外国語活動で学んだことが、生活場面や他教科等の学習に生かされることも期待できる。

このように、指導者が「小学校教育の中の外国語活動」という意識をもって授業を構成していくことで、他教科等との双方向のつながりが生まれ、児童の中で学びが統合されていくのである。

評価規準、評価方法など、新学習指導要領の下での学習評価については、平成28年12月の中教審答申の指摘※を踏まえ、今後の国における具体的な検討を受けて、追記・修正をする予定である。
なお、平成30・31年度の移行期間における学習評価については、平成29年度中に通知される予定である。

※「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）（平成28年12月21日中央教育審議会）の主な指摘

- 観点別評価については、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理する。
- これらの（3つの）観点については、毎回の授業で全てを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てていくことが重要。
- 学習評価の工夫改善に関する参考資料についても、詳細な基準ではなく、資質・能力を基に再整理された学習指導要領を手掛かりに、教員が評価規準を作成し見取っていくために必要な手順を示すものとなることが望ましい。そうした参考資料の中で、各教科等における学びの過程と評価の場面との関係性も明確にできるよう工夫することや、複数の観点を一体的に見取ることも考えられることなどが示されることが求められる。
- 指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要。
- 「主体的に学習に取り組む態度」については、子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直ししながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。

本単元の指導案には、共通の絵カードやテキスト、デジタル教材を使用する例を示したが、児童の実態に合った独自の教材を作成し活用することで、より児童の心を引きつけ、意欲的に取り組ませることが可能となる。以下にその例を紹介する。

1 写真の活用

「授業研究の視点② 聞く必然のある活動」(p.46-47)に示したように、第1時で“rainbow”という言葉に出合わせる際には、虹の写真を使用し、クイズ形式で導入することができる。第2時の「Who am I? クイズ」でも身近な教員の写真を教材化した。「何だろう」「誰かな」など、児童の心を動かすための教材として写真は効果的である。印刷したものを画用紙に貼ったり、データとして保存したものをテレビやスクリーンに映したり、活動やねらいに応じて活用の仕方を工夫したい。

2 ワークシートの活用

第4時で自己紹介シートを作成する際には、テキストのページを活用してもよいが、学級の児童に合ったワークシートを作成し、活用することで、より意欲的に活動に取り組むことができる。自己紹介をした友達にサインをもらう枠をつくったり、同じものが好きな友達の名前を書けるようにしたりすることもできるだろう。図画工作科と関連させて作成する場合は、絵の枠を大きくしてもよい。一人一人の実態をよく知っている学級担任だからこそ、児童が「早く紹介してみたい」と思えるようなシートが作成できるのである。単元終了後は自己紹介シートを教室掲示として活用するとよい。

3 教具の活用

(1) ○×カード

第3時では友達の好き嫌いを予想して尋ねる「○×クイズ」がある。予想する際には手で大きく○×を表すこともできるが、全学年共通の教具として「○×カード」を用意しておくともよい。画用紙の両面に○×を印刷したり、市販のものを購入したりする方法がある。各自がカードを持ち「1, 2, 3」で同時に○か×を挙げることで、全員が活動に参加することができ、自分の予想が合っているかどうか“Do you like ~?”と尋ねようとする意欲も一層高まるであろう。

(2) 教材提示装置

単元終末の活動でグループによる自己紹介の後、数名が全体の前で発表する機会を設けることも効果的である。その際に発表する児童が自己紹介シートを手を持つことも考えられるが、教材提示装置を使って、テレビやスクリーンに大きく提示する方法もある。指導者が自己紹介の例を示す場合や、テキストに記入する場所を指示する場合等、教材提示装置を使用することで視覚的に示すことができるため、年間を通して効果的に活用したい。

児童が主体的に学ぶ授業づくりには魅力的な教材が欠かせない。活動のねらいに合った児童の意欲を喚起する教材の開発や工夫に努め、授業の充実を目指したい。

授業研究の視点⑦ 「主体的・対話的で深い学び」の在り方

理論編「**2** 小学校外国語教育における『主体的・対話的で深い学び』の在り方」(p.156-157)も参照いただきたいが、ここでは、本単元の具体的な場面を取り上げ、解説する。

1 「主体的」であるか

児童が主体的に学びに向かっている時、多くの場合、児童が「面白そう」「やってみたい」と心を躍らせ、「思考している」「思考が活発になっている」状態であると思われる。主体的な学びを促すには、こうした場면을授業の中に意図的に創り出す必要があり、指導者にはそのための授業設計や指導方法の工夫が求められる。例えば、第2時には、児童にとってなじみのある教職員を題材とした「Who am I? クイズ」が設定されている。指導者は封筒を取り出し、“Who am I? Please guess!”と児童の興味を引きながらヒントを出す。こうした場面設定が児童の好奇心を刺激し、ヒントを手がかりに課題解決に向かおうとする児童の主体的な学びを促すと思われる。この活動は一例であるが、児童の興味・関心、発達の段階に即した課題設定は主体的な学びを実現させる上での重要なポイントとなる。

2 「対話的」であるか

「対話的な学び」の視点からは、児童が考えを広げ深める、他者との協力や対話的な学びの過程の設定が求められる。第1時の導入部分には、児童各々が描いた虹を見せ合うとともに海外の友達の作品も試聴し、使った色やその順序を発表し合い気付きを共有する活動が組まれている。活動を通して、児童は多様な見方に触れ、それらを認め合うことの大切さを体験的に学ぶであろう。また、第2時の先生の好みを知る活動、第3時の○×クイズ、インタビュー等もこの視点に当たる活動である。互いの気持ちや考えを伝え合う言語活動を行う中で、児童は新たな発見をし、自分や他者への理解を深め、自身の考え方を広げたり深めたりしていくことが期待される。

3 「深い学び」であるか

本単元終末の活動は、「自分の好みを紹介し合う」ことである。児童は、この活動に至るまでに、第1時から、新しい語や表現に順次出会い、それらに慣れ親しむコミュニケーション活動を通して自他への理解を深め、毎時間の振り返りにより自身の学びや課題を自覚してきている。そうした経験や様々な活動から得られた知識及び技能を、終末の活動で実際に活用するのである。つまり、ここでは、好みを交えて自己紹介するという場面(目的)の中で、児童は必要な言語材料を選び、相手に伝わるよう思考し工夫しながら表現する。単元を通した一連の過程の中で、児童は自分の思いや考えを深めたり更新したり、自ら考え判断し課題を解決しようとしたりする中で、言語材料の知識・技能が確かなものとなり、「深い学び」が実現されていく。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善が求められている。ただそれは、「活動」をしていればよいということではない。指導者自身が、児童に育てたい資質・能力を意識し、児童の思考が活性化されるような、学ぶ過程を大切にした授業づくりを進める必要がある。そして、その授業づくりの基盤となるのが、言うまでもなく指導者の深い児童理解である。